今までに公表した活断層及び海溝型地震の長期評価結果一覧

○長期評価における地震発生確率値について

1. はじめに

日本及びその周辺は、非常に地震の多い地域です。時には、平成7年(1995年)兵庫県南部地震や平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震のように、揺れや津波によって大きな被害を受けてきました。こうした大きな被害をもたらす地震はどこでも起きる可能性がありますが、現在の地震学では、地震の規模やその発生日時を正確に予測することはできません。

2. 地震調査研究推進本部の取組み

地震調査研究推進本部では、「同じ場所で同じような地震がほぼ定期的に繰り返す」という仮定のもとに、大きな被害をもたらす可能性が高い、プレート境界やその付近で起きる地震(海溝型地震)や活断層で起きる地震について地震発生確率値を含む長期評価結果を公表しています。

地震発生確率値は、歴史記録や調査研究等から分かった過去の地震活動記録を統計的に処理し、「今後ある一定期間内に地震が発生する可能性」を確率で表現したものです。

3. 地震発生確率値の留意点

- 〇想定した次の地震が起きないかぎり、年数経過とともに地震発生確率値は増加していきます。 (過去の活動記録が不明なため、年数経過によらず地震発生確率値が変わらない統計処理を行っている場合もあります)
- 〇過去の地震活動の時期や発生間隔は、幅を持って推定せざるを得ない場合が多いため、地震発生確率値は 不確定さを含んでいます。また、新たな知見が得られた場合には、地震発生確率値は変わることがあります。
- 〇活断層で起きる地震は、発生間隔が数千年程度と長いため、30年程度の間の地震発生確率値は大きな値とはなりません。例えば、兵庫県南部地震の発生直前の確率値を求めてみると $0.02\sim8\%$ 、平成28年(2016年)熊本地震の場合はほぼ $0\sim0.9\%$ でした。地震発生確率値が小さいように見えても、決して地震が発生しないことを意味してはいません。

地震は、発生すれば甚大な被害を及ぼす可能性がありますので、日頃から耐震補強や家具の固定などの対策を講じておくことが重要です。

: 経年等により値が変わったもの

1-1. 主要活断層帯の長期評価の概要(算定基準日 平成30年(2018年)1月1日)

(陸域・沿岸域の活断層から発生する地震の今後30,50,100年以内の地震発生確率等)

断層帯名 (起震断層 <i>/活動区間</i>)	長期評価で 予想 した 地震規模	我が国の主 活断層におり 相対的評価	ける		地震発	生確率(注1	地震後	平均活動間隔	
(起展断 <i>唱/ 沾斯区间)</i>	で展別後(マグニチュード)	ランク	色	30:	年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注33)	7.6程度	S*ランク			13%~30%	20%~50%	40%~70%	1.0-2.0	600年-800年程度
(<i>中北部区間</i>) ^(注5)	7.0在反	3 本 ノンク			15%~~30%	20% ~ 50%	40% ~ 70%	1.0-2.0	約1,200年前以後-約800年前以前
糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注33)	7.7程度	S*ランク			0.008%~16%	0.02%~20%	0.05%~40%	0.4-1.3	1,000年-2,400年程度
(北部区間)	1.17主/支	54727			0.000% - 10%	0.02% - 20%	0.00% 40%	0.4 1.5	約1,300年前以後-約1,000年前以前
日奈久断層帯 ^(注9)	7.3程度	S*ランク			ほぼ0%~16%	ほぼ0%~30%	ほぼ0%~50%	0.1-1.5	1,100年-6,400年程度
(八代海区間)	1.6/1生/文	01777			1313070 1070	1313070 0070	1515070 0070	0.1 1.0	約1,700年前以後-約900年前以前
境峠•神谷断層帯	7.6程度	S*ランク			0.02%~13%	0.04%~20%	0.09%~40%	0.5-2より大	約1,800年-5,200年
(主部)(注7)	,—,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,								約4,900年前-2,500年前
中央構造線断層帯(注6)	7.5程度	S*ランク			ほぼ0%~12%	ほぼ0%~20%	ほぼ0%~40%	0.2-0.9	約700年-1,300年
(石鎚山脈北縁西部区間)									15世紀以後-18世紀以前
阿寺断層帯	6.9程度	S*ランク			6%~11%	10%~20%	20%~30%	1.2-1.9	約1,800年-2,500年
(主部/ <i>北部</i>) ^(注5)									約3,400年前-3,000年前
三浦半島断層群	6.6程度	S*ランク			6%~11%	9%~20%	20%~30%	1.0-1.4	1,600年-1,900年程度
(主部/武山断層帯) ^(注5)	もしくはそれ以上								約2,300年前-1,900年前
安芸灘断層帯(注39)	7.2程度	S*ランク			0.1%~10%	0.2%~20%	0.4%~30%	0.6-2.4	2,300年-6,400年程度
									約5,600年前以後-3,600年前以前
森本•富樫断層帯	7.2程度	S*ランク			2%~8%	3%~10%	7% ~ 30%	0.7-1.2	1,700年-2,200年程度
火 4. Ⅲ 数 □ 4. ₩ 1. ₩ (注33)									約2,000年前-4世紀
糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注33)	7.4程度	S*ランク			0.8%~8%	1%~10%	4%~30%	0.6-1.0	1,300年-1,500年程度 約1,300年前以後-約900年前以前
(中南部区間)									約2,500年前以後-約900年前以前
山形盆地断層帯 (<i>北部</i>)	7.3程度	S*ランク			0.002%~8%	0.004%~10%	0.01%~20%	0.4-1.6	約3,900年前-1,600年前
									2,300年制 2,300年制
高田平野東縁断層帯) (音田平野東縁断層帯)	7.2程度	S*ランク		我が国	ほぼ0%~8%	ほぼ0%~10%	ほぼ0%~20%	0.07-1.5	約3,500年程度
完道(鹿島)断層 完道(鹿島)断層	7.0程度			の主な					約3,300年月19世紀
ケース2	もしくはそれ以上	S*ランク		活断層 の中で	0.9%-6%	2%-10%	3%-20%	0.8-1.8	約5,900年前以後-約3,700年前以前
警固断層帯	00112 01001			の中で は <u>高い</u>					約3,100年-5,500年
(南東部)	7.2程度	S*ランク		グループ	0.3%~6%	0.4%~9%	0.9%~20%	0.6-1.4	約4,300年前-3,400年前
砺波平野断層帯・呉羽山断層帯				に属す る					3,000年-7,000年程度
(砺波平野断層帯東部)	7.0程度	S*ランク			0.04%~6%	0.06%~10%	0.1%~20%	0.5-1.4	約4,300年前-3,600年前
									約4,000年-13,000年
弥栄断層	7.7程度	S*ランク			ほぼ0%~6%	ほぼ0%~10%	ほぼ0%~20%	0.02-2より大	約11,000年前以後-約300年前以前
日奈久断層帯(注9)	**								3,600年-11,000年程度
(日奈久区間)	7.5程度	S*ランク			ほぼ0%~6%	ほぼ0%~10%	ほぼ0%~20%	0.2-2.3	約8,400年前以後-約2,000年前以前
庄内平野東縁断層帯	2 OTT #	0.17			____	\\	\		約2,500年-4,600年
(南部)	6.9程度	S*ランク			ほぼ0%~6%	ほぼ0%~10%	ほぼ0%~20%	0.05-1.2	約3,000年前-18世紀
新庄盆地断層帯	7 1 111 🛱	C-1> - A			50/DI	OW 1).1 T	000017	1 001 =	4,000年程度
(東部)	7.1程度	S*ランク			5%以下	8%以下	20%以下	1.6以下	約6,200年前以後
田扒中代邢紫园井	7.0和库以上	ロルニンカ			2%~5%	3%~9%	7%~20%	10 1601	3,600年-5,000年程度以上
黒松内低地断層帯	7.3程度以上	S*ランク			以下	以下	以下	1.0-1.6以下	約5,900年前-4,900年前
#* マハ. II にWに 同 ##(注4)	CO知序	ロルニンカ			0.20/ - 50/	0.6% - 0%	10/ - 200/	0.6.1.1	約2,800年-4,200年
櫛形山脈断層帯 ^(注4)	6.8程度	S*ランク			0.3%~5%	0.6%~8%	1%~20%	0.6-1.1	約3,200年前-2,600年前
たり分はまるが見せ (注10)	7.4程度	S*ランク			ほぼ0%~5%	ほぼ0%~7%	ほぼ0%~10%	0.2-2.2	約5,000年
奈良盆地東縁断層帯(注10)	7.4住及	34727			(\$\(\pi\)\(\pi\)\(\pi\)	(1(1U%~~1%	(\$\(\pi\)\(\pi\)\(\pi\)	0.2-2.2	約11,000年前-1,200年前
砺波平野断層带 · 呉羽山断層帯	7.9程度	S*ランク			ほぼ0%~5%	ほぼ0%~8%	ほぼ0%~20%	0.3-1.2	3,000年-5,000年程度
(呉羽山断層帯)	7.2程度	3 年 ノンツ			14140/0 ~ 070	1414U/0°~070	1414010 ~20%	0.0 1.2	約3,500年前-7世紀
高山•大原断層帯	7.2程度	S*ランク			ほぼ0%~5%	ほぼ0%~7%	ほぼ0%~10%	0.07-1.3	約3,600年-4,300年
(国府断層帯)	1.4年/文	ひかノマク			15150/0 - 0/0	1212010 - 1/0	14140/0 - 1070	0.01 1.3	約4,700年前-300年前
サロベツ断層帯	7.6程度	S*ランク			4%以下	7%以下	10%以下	1.3以下	約4,000年-8,000年
ヶピーン 阿/官市	1.07生/文	しかフマン			エルタン 十	1706/1	10/05/	1.067	約5,100年前以後
塩沢断層帯(注15)(注34)	6.8程度	Sランク			4%以下	6%以下	10%以下	不明	800年程度以上
塩(八四)/冒田	以上	3/27			1/06V L	0/06/1	10/02/	נפיו	不明

断層帯名	長期評価で 予想 した 地震規模	我が国の主 活断層におり 相対的評価	ける		地震発	生確率(注1)	地震後 経過率	平均活動間隔
(起震断層 <i>/ 活動区間</i>)	で展別後(マグニチュード)	ランク	色	304	年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
周防灘断層帯(注38)	7.6程度	S*ランク			2%~4%	4%~6%	7%~10%	1.3-1.9	概ね5,800年-7,500年
(周防灘断層帯主部区間)	7.0年/文	34727			2/0 - 4/0	4/0 - 0/0	1/0 -10/0	1.5 1.5	約11,000年前以後-10,000年前以前
菊川断層帯 ^(注36)	7.6程度	S*ランク			0.1%~4%	0.90/ - 70/	0.40/ = 1.00/	0.6-1.4	約4,100年-約5,900年
(<i>中部区間</i>)	7.0住及	3本 ノンク			0.1% 4%	0.2%~7%	0.4%~10%	0.0-1.4	約5,900年前以後-約3,300年前以前
雲仙断層群	7.041 🕳	C -11. / b) T) T ON 400) T) T ON TO)T)TOV 100	0.0.1.0	約2,500年-4,700年
(南西部/ <i>北部</i>)	7.3程度	S*ランク			ほぼ0%~4%	ほぼ0%~7%	ほぼ0%~10%	0.2-1.0	約2,400年前-11世紀以前
木曽山脈西縁断層帯	6.3程度	S*ランク		我が国	ほぼ0%~4%	ほぼ0%~7%	ほぼ0%~10%	0.2-1.4	約4,500年-24,000年
(主部/ <i>南部</i>)	0.3住及	3 本 ノンク		の主な活断層	13130% ~ 4%	(±(±0%) ~ 1%	\2\20% ~ 10%	0.2-1.4	約6,500年前-3,800年前
十日町断層帯	7.4程度	S*ランク		の中で	3%以上	5%以上	10%以上	0.9以上	3,300年程度
(西部)	7.41主/支	3 本 ノン ク		は <u>高い</u> グル-プ	37000.	570KL	10%15/1	0.9以上	約3,100年前以前
上町断層帯	7.5程度	S*ランク		に属す	2%~3%	3%~5%	6%~10%	1.1-2より大	8,000年程度
工門例實份	7.3在皮	3 本 ノン ク		る	270 - 370	370 - 370	0% - 10%	1.1-2より人	約28,000年前-9,000年前
琵琶湖西岸断層帯	7.1程度	Sランク			1%~3%	2%~5%	4%~10%		約1,000年-2,800年
(北部)(注12)	1.1住皮	3/27			170 - 570	270 ~ 570	4% 10%		約2,800年前-約2,400年前
三浦半島断層群	6.7程度	S*ランク			ほぼ0%~3%	ほぼ0%~5%	ほぼ0%~10%	0.3-0.8	1,900年-4,900年程度
(主部/ <i>衣笠・北武断層帯</i>) ^(注5)	もしくはそれ以上	34727			13130%~3%	(1)(1)(0% ~ 5%	\2\20%^~10%	0.5-0.6	6-7世紀
福智山断層帯	7.2程度	S*ランク			ほぼ0%~3%	ほぼ0%~4%	0.001%~8%	0.4~2より大	約9,400年-32,000年
個省 四例 僧 佈	1.21年/支	3 本 ノンク			(1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)	(\$\(\pi\)\(\pi\)\(\pi\)	0.001% ~ 8%	0.4~2より入	約28,000年前以後-13,000年前以前
砺波平野断層带•呉羽山断層帯	7.2程度	A*ランク			ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	ほぼ0%~8%	0.2-1.2	約6,000年-12,000年 **********************************
(砺波平野断層帯西部)	1.2作主/支	AAJZJ			もしくはそれ以上	もしくはそれ以上	もしくはそれ以上	もしくはそれ以上	約6,900年前-1世紀
日 45 2年以下 12 11 (注13)	7.6程度	Aランク			OW	20/ - 40/	EW - OW		1,200年-1,900年程度
邑知潟断層帯 ^(注13)	7.0住皮	Ayyy			2%	3%~4%	5%~8%	_	約3,200年前-9世紀
10 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0	0.0知度	A ルランカ			00/17/17	40/101	100/101	0.701	約1,200年-3,700年
長岡平野西縁断層帯	8.0程度	A*ランク			2%以下	4%以下	10%以下	0.7以下	13世紀以後
北古利米屋	7.049 庄	A ルコンカ			00/17/75	20/17/	CWDIT	0.001	3,400年-4,000年程度
北由利断層	7.3程度	A*ランク			2%以下	3%以下	6%以下	0.8以下	約2,800年前以後
ナロMC 〒 ##(注5)	7.4程度	A*ランク			0 EV ~ .2V	0.9% ~ .4%	20/ ~ .70/	0.0-2.0	10,000年-15,000年程度
立川断層帯 ^(注5)	7.4住及	A本フング			0.5%~2%	0.8%~4%	2%~7%	0.9-2.0	約20,000年前-13,000年前
岩国-五日市断層帯(注37)	7.6程度	A*ランク			0.00% - 0%	0.05% - 2%	0.10 - 60	0.6.1.0	約9,000年-18,000年
(岩国断層区間)	7.0在反	AAJJJ			0.03%~2%	0.05%~3%	0.1%~6%	0.6-1.2	約11,000年前-10,000年前
屏風山•恵那山-猿投山断層帯	7.7程度	A*ランク			ほぼ0%~2%	ほぼ0%~3%	0.001%~6%	0.4-1.1	約7,200年-14,000年
(恵那山-猿投山北断層帯)	1.11主反	AAJJJ			14140% ~ 2%	(4(4Um ~ 3m	0.001% 00%	0.4-1.1	約7,600年前-5,400年前
当別断層	7.0程度	A*ランク			ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	ほぼ0%~8%	0.1-1.5	7,500年-15,000年程度
ヨがり肉に	7.0在反	A本フンク			V3V3U%~2%	(J(JU%)~4%	13130%~0%	0.1-1.5	約11,000年前-2,200年前
党担 C 法账 园 #(注14)	7.3程度	Aランク		我が国	1%	2%	3%~5%	_	概ね2,000年-3,000年
曽根丘陵断層帯 ^(注14)	7.3作主/支	AJZJ		の主な 活断層	1 70	∠70	370 - 570		約10,000年前以後
山形盆地断層帯	7.3程度	Aランク		の中で	1%	2%	4%	不明	2,500年程度
(<i>南部</i>) ^(注15)	7.3作主/支	AJZJ		は <u>やや</u> <u>高い</u> グ	1 70	∠70	470	1197	不明
中央構造線断層帯(注6)	7.7程度	Aランク		<u>雨い</u> り ループに	1%以下	2%以下	6%以下	0.6以下	900年-1,200年
(讃岐山脈南縁東部区間)	1.1任反	A		属する	1/05/	2/05/	0/05/1	0.00	16世紀以後
頓宮断層	7.3程度	A*ランク			1%以下	2%以下	4%以下	1.0以下	約10,000年以上
吸 占 的/信	1.5/主/交	Awyoy			1,000	2/05/	4/02/	1.000	約10,000年前-7世紀
人吉盆地南縁断層	7.1程度	A*ランク			1%以下	2%以下	4%以下	0.9以下	約8,000年以上
八日益地用豚剛層	1.11生反	ANDOD			1/05/	2/05/	4/05/	0.35%	約7,300年前以後-3,200年前以前
長町-利府線断層帯 ^(注16)	7.0~7.5程度	Aランク			1%以下	2%以下	3%以下	_	3,000年程度以上
文品 不识的 旅倒 宿 市	1.0 1.0	11/0/			17000	2/05/1	0,000		約16,000年前以後
花輪東断層帯 ^{(注4)(注44)}	7.0程度	Aランク			0.6%~1%	1%~2%	2%~3%	_	3,000年-5,000年程度
化轴水网冶价	1.0/主/文	11/0/			0.0% 1%	170 270	2/0 3/0		約15,000年前以後
青森湾西岸断層帯(注15)	7.3程度	Aランク			0.5%~1%	0.8%~2%	2%~3%	不明	3,000年-6,000年程度
	1.0/主/又	11/4/			0.070 - 170	0.070 - 270	۵/0 - J/0	.1,61	不明
雲仙断層群	7.1程度	Aランク			0.5%~1%	0.8%~2%	2%~5%	_	約2,100年-6,500年
(南西部/ <i>南部</i>) ^(注17)	…江土/又	. 1, 4 /			0.070 170	5.5% 2%	2,0 0,0		約4,500年前以後-16世紀以前
甑断層帯	7.5程度	Aランク			0.3%~1%	0.5%~2%	0.9%~4%	不明	2,400年-11,000年程度
(甑区間) ^(注15)	1.0/王/又	11/4/			0.070 - 170	0.070 - 270	U.U/0 - 1/0	.1,61	不明
山崎断層帯	7.7程度	Aランク			0.09%~1%	0.2%~2%	0.4%~4%	0.5-0.6	約1,800年-2,300年
(主部/ <i>北西部</i>)	111年/又	11/4/			J. J	U.2/0 2/0	U.1/0 1/0	5.0 0.0	868年播磨国地震

断層帯名 (起震断層/ <i>活動区間</i>)	長期評価で 予想 した 地震規模	我が国の主 活断層におい 相対的評価 ⁽	ける		地震発生	生確率(注1)	地震後経過率	平均活動間隔
(心质例信 <i>) 心划心间)</i>	(マグニチュード)	ランク	色	30:	年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
中央構造線断層帯 ^(注6) (<i>紀淡海峡-鳴門海峡区間</i>)	7.5程度	A*ランク			0.005%~1%	0.009%~2%	0.02%~4%	0.4-0.8	約4,000年-6,000年 約3,100年前-2,600年前
六甲·淡路島断層帯	7.9程度	Aランク			ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~6%	0.1-0.6	900年-2,800年程度
(主部/ <i>六甲山地南縁-淡路島東岸区間</i>) 函館平野西縁断層帯	7.0~7.5程度	A*ランク			ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~3%	0.02-1.1	16世紀 13,000年-17,000年
	1.0 1.0往反	A*///			1313070 - 170	1212010 - 210	(3(30)) - 0/0	0.02 1.1	14,000年前以後
布引山地東縁断層帯 (西部)	7.4程度	A*ランク			ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	0.02-1.6	17,000年程度 約28,000年前-400年前
月岡断層帯	7.3程度	A*ランク			ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~3%	0.1以下-0.9	7,500年以上
11. L Not 🖂 #b	5 0 TH FF	> -							約6,500年-900年前 概ね8,000年
出水断層帯	7.0程度	A*ランク			ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	0.3-0.9	約7,300年前以後-2,400年前以前
六日町断層帯 (<i>北部</i>) (ケース1) ^(注18)	7.1程度	Aランク			0.4%~0.9%	0.7%~2%	1%~3%	-	約3,200年-7,600年 約4,900年前-16世紀
伊勢湾断層帯	7.0程度	A*ランク			0.2%~0.8%	0.3%~1%	0.7%~3%	0.6-0.8	8,000年程度
(白子一野間断層) 三峠·京都西山断層帯	7 F10 PF	A . L = 2 . A	_			17 17 20 10) 77) 77 ° 00 ′ 00 ′		概ね6,500年前-5,000年前約3,500年-5,600年
(京都西山断層帯)	7.5程度	A*ランク			ほぼ0%~0.8%	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~3%	0.3-0.7	約2,400年前-2世紀
高山·大原断層帯 (高山断層帯) ^(注15)	7.6程度	Aランク			0.7%	1%	2%	不明	4,000年程度 不明
十日町断層帯	7.0程度	Aランク			0.4%~0.7%	0.6%~1%	1%~2%	不明	4,000年-8,000年程度
(東部) ^(注15) 屏風山·恵那山-猿投山断層帯	, , , , , ,								不明 ^(注19) 4,000年-12,000年程度
(屏風山断層帯) ^(注15)	6.8程度	Aランク			0.2%~0.7%	0.4%~1%	0.8%~2%	不明	不明
養老-桑名-四日市断層帯	8程度	Aランク			ほぼ0%~0.7%	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~3%	0.2-0.6	1,400年-1,900年
大久保断層 ^(注15)	7.0程度以上	Aランク		~ !> >> □	0.6%	1%	2%	不明	5,000年程度
新庄盆地断層帯				我が国の主な					不明 4,700年程度
(西部)(注15)	6.9程度	Aランク		活断層 の中で	0.6%	1%	2%	不明	不明
増毛山地東縁断層帯・沼田-砂川付近の断層帯 (増毛山地東縁断層帯) ^(注15)	7.8程度	Aランク		は やや 高い グ ル-プに	0.6%以下	1%以下	2%以下	不明	5,000年程度以上 不明
三峠·京都西山断層帯 (三峠断層) ^(注15)	7.2程度	Aランク		属する	0.4%~0.6%	0.7%~1%	1%~2%	不明	5,000年-7,000年程度 3世紀以前
平山一松田北断層帯(注34)	 6.8程度	A*ランク			0.09%~0.6%	0.2%~1%	0.3%~2%	0.5-0.7	4,000年-5,000年程度
三方•花折断層帯									約2,700年前 4,200年-6,500年
(花折断層帯/中南部)	7.3程度	A*ランク			ほぼ0%~0.6%	ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	0.2-0.7	2,800年前-6世紀
魚津断層帯(注15)	7.3程度	Aランク			0.4%以上	0.6%以上	1%以上	不明	8,000年程度以下 不明
佐賀平野北縁断層帯 ^(注15)	7.5程度	Aランク			0.2%~0.5%	0.3%~0.8%	0.5%~2%	不明	6,600-19,000年程度
十勝平野断層帯									不明 7,000年-21,000年程度
(光地園断層) ^(注20)	7.2程度	Aランク			0.1%~0.4%	0.2%~0.7%	0.5%~1%	-	約21,000年前以後に2回
中央構造線断層帯 ^(注6) (<i>讃岐山脈南緑西部区間</i>)	8.0程度 もしくはそれ以上	Aランク			ほぼ0%~0.4%	ほぼ0%~0.8%	ほぼ0%~2%	0.2-0.5	約1,000年-1,500年 16世紀以後-17世紀以前
中央構造線断層帯(注6)	7.2程度	Aランク			0.007%~0.3%	0.01%~0.5%	0.04%~1%	0.4-0.6	約2,500年-2,900年
(<i>根来区間</i>) 石狩低地東縁断層帯		A = 1 / A	_		0.00/10/7	0.00/1/17	0.0001	78	7世紀以後-8世紀以前 17,000年程度以上
(南部)(注15)	7.7程度以上	Aランク			0.2%以下	0.3%以下	0.6%以下	不明	不明
十勝平野断層帯 (主部) ^(注15)	8.0程度	Aランク			0.1%~0.2%	0.2%~0.3%	0.5%~0.6%	不明	17,000年-22,000年程度 不明
鈴鹿西縁断層帯(注15)	7.6程度	Aランク			0.08%~0.2%	0.1%~0.3%	0.3%~0.6%	不明	約18,000年-36,000年 不明
生駒断層帯	7.0~7.5程度	Aランク			ほぼ0%~0.2%	ほぼ0%~0.3%	ほぼ0%~0.6%	0.2-0.5	3,000年-6,000年 400年頃以後-1,000年頃以前
屏風山·恵那山-猿投山断層帯	 7.4程度	Aランク			0.1%	0.2%	0.3%	 不明	30,000年程度
(加木屋断層帯) ^(注15) 山崎断層帯	1.1/王/又	11/4/			V.1/0	0.270	0.0/0	- 101	不明 24,000年-53,000年程度
口呵呵眉帝 (那岐山断層帯) ^(注15)	7.3程度	Aランク			0.06%~0.1%	0.09%~0.2%	0.2%~0.4%	不明	74,000年-53,000年程度 不明

断層帯名	長期評価で 予想 した 地震規模	我が国の主 活断層におけ 相対的評価 ⁽	ける	地震発生	生確率(注1)	地震後 経過率	平均活動間隔
(起震断層 <i>/ 活動区間</i>)	では、では、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは、これでは	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
深谷断層帯 ^(注35)	7.9程度	Aランク		(F)F0%~.0.1%	ほぼ0%~0.2%	17170V~.0 5V	0.2-0.6	10,000年-25,000年程度
休台	1.9性及	AJZJ		(4(40% °0.1%	(A(AUN ~ U.2N	(4)40% ~0.0%	0.2-0.0	約6,200年前以後-約5,800年前以前
糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注33)	7.6程度	Aランク)	ほぼ0%~0.2%	17170W~.0 1W	0.2-0.5	4,600年-6,700年程度
(南部区間)	7.0往及	AJZJ		(4(40% °0.1%	(A(AUM ~ 0.2%	(\$\\\$\0\%\ \^\0\.4\%	0.2-0.5	約2,500年前以後-約1,400年前以前
(注15)	7 410 E	751.4		0.040/ 0.000/	0.050	0.10/ 0.00/	→ 111	約34,000年-68,000年程度
緑川断層帯 ^(注15)	7.4程度	Zランク		0.04%~0.09%	0.07%~0.1%	0.1%~0.3%	不明	不明
福井平野東縁断層帯	7 OTT ##	77		ほぼ0%~	1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-	1-7-1-00 0 000		約6,300年-10,000年
(主部)	7.6程度	Zランク		0.07%	(はは0%~0.1%	ほぼ0%~0.3%	0.3-0.5	約3,400年前-2,900年前
^^	<=	`		ほぼ0%~				約6,500年-12,000年
鈴鹿東縁断層帯	7.5程度	Zランク		0.07%	ほぼ0%~0.1%	ほぼ0%~0.2%	0.2-0.5	——約3,500年前-2,800年前
	7.5程度			ほぼ0%~	ほぼ0%~			1,000年-2,000年程度
有馬-高槻断層帯	(7.5 ± 0.5)	Zランク		0.03%	0.08%	ほぼ0%~0.4%	0.2-0.4	1596年慶長伏見地震
富良野断層帯	(110 - 010)) T) T'00/	171700			4,000年程度
(西部)	7.2程度	Zランク		ほぼ0%~ 0.03%	ほぼ0%~ 0.05%	ほぼ0%~0.1%	0.07-0.5	2世紀-1739年
(日中)								5,000年-6,300年程度
長井盆地西縁断層帯	7.7程度	Zランク		0.02%以下	0.04%以下	0.1%以下	0.5以下	約2,400年前以後
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○								
会津盆地西縁・東縁断層帯	7.7程度	Zランク		ほぼ0%~ 0.02%	ほぼ0%~ 0.03%	ほぼ0%~ 0.07%	0.3-0.5	約6,300年-9,300年
(会津盆地東縁断層帯)				0.02%	0.03%	0.0170		約3,000年前-2,600年前
中央構造線断層帯 ^(注6)	7.3程度	Zランク		0.01%以下	0.03%以下	0.1%以下	0.4以下	約1,500年-1,800年
(石鎚山脈北縁区間)								15世紀以後
山崎断層帯	7.3程度	Zランク		ほぼ0%~	ほぼ0%~	0.002%~	0.4	3,900年程度
(主部/ <i>南東部</i>)	1.57至/文			0.01%	0.02%	0.05%	0.1	4-6世紀
六日町断層帯	7.3程度	Zランク		ほぼ0%~	ほぼ0%~	ほぼ0%~	0.3-0.5	約6,200年-7,200年
(南部)	1.3 怪没	ムノング		0.01%	0.02%	0.05%	0.3-0.5	約2,900年前-2,000年前
富良野断層帯	7 010 15	750.4		ほぼ0%~	ほぼ0%~	ほぼ0%~		9,000年-22,000年程度
(東部)	7.2程度	Zランク		0.01%	0.02%	0.05%	0.1-0.5	約4,300年前-2,400年前
	<=							約3,000年-7,000年
大阪湾断層帯	7.5程度	Zランク		0.004%以下	0.008%以下	0.02%以下	0.4以下	9世紀以後
(Short of)								2,100年-3,700年程度
万年山-崩平山断層帯 ^(注11)	7.3程度	Zランク		0.003%以下	0.007%以下	0.02%以下	0.4以下	13世紀以後
) T T O -)T)T'00) T.) T O O .		4,000年-6,000年程度
伊勢原断層	7.0程度	Zランク		ほぼ0%~ 0.003%	ほぼ0%~ 0.005%	ほぼ0%~ 0.01%	0.05 - 0.4	5世紀-18世紀初頭
	7.0程度							約3,300年-4,900年
ハ 旦 ()此 西 / 阿 / 眉 ケース1	もしくはそれ以上	Zランク		ほぼ0%~ 0.003%	ほぼ0%~ 0.005%	ほぼ0%~ 0.01%	0.1 - 0.4	8世紀以後-14世紀以前
,	もしくはてれば上							
伊勢湾断層帯	6.9程度	Zランク		ほぼ0%~ 0.002%	ほぼ0%~ 0.004%	ほぼ0%~ 0.009%	0.2 - 0.4	5,000年-10,000年程度
(主部/南部)				0.002%	0.001/0	0.000%		概ね2,000年前-1,500年前
布引山地東縁断層帯	7.6程度	Zランク		0.001%	0.002%	0.005%	0.4	25,000年程度
(東部)								11,000年前頃
野坂·集福寺断層帯	7.3程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04-0.1	約5,600年-7,600年 もしくはそ
(野坂断層帯)				もしくはそれ以上	もしくはそれ以上	もしくはそれ以上	もしくはそれ以上	15-17世紀
中央構造線断層帯 ^(注6)	8.0程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04-0.1	約2,900年-3,300年
(伊予灘区間)	もしくはそれ以上	2/4/		1010.07	1010070	10101070	0.01 0.1	17世紀以後-19世紀以前
伊那谷断層帯	8.0程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05-0.1	約5,200年-6,400年
(主部) ^(注21)	0.0往及			\$4\$400	1414010	1414070	0.05 0.1	14-18世紀
石狩低地東縁断層帯	7.9程度	Zランク) I I I TOW) T.) T '00/	ほぼ0%~	0.07.0.9	1,000年-2,000年程度
(主部)	1.9性及	ムノング		ほぼ0%	ほぼ0%	0.002%	0.07-0.3	1739年-1885年
14.74.11MC 12.44.	7.0知序	751.4) T l T o o) or lord on	17 17 000		約2,300年-2,700年
跡津川断層帯	7.9程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06-0.07	1858年飛越地震
+ 11185 E 44	F 04H H	7			^			約3,600年-6,900年
庄川断層帯	7.9程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06-0.3	11-16世紀
								16,000年-26,000年
北上低地西縁断層帯	7.8程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	4,500年前頃
 阿寺断層帯								約1,700年
(主部/ <i>南部</i>)	7.8程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.3	1586年天正地震
\HP/ <i>[†† [PP]</i>								8,000年程度
福島盆地西縁断層帯	7.8程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	·
十十十十十十分 15- 11-(注6)				<u> </u>				約2,200年前-3世紀
中央構造線断層帯(注6)	7.8程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	約1,600年-1,700年
(<i>豊予海峡-由布院区間</i>)								17世紀

断層帯名	長期評価で 予想 した 地震担増	我が国の主 活断層にお 相対的評価	ける	地震発	生確率 ^{(注1})	地震後 経過率	平均活動間隔
(起震断層 <i>/ 活動区間</i>) 	地震規模 (マグニチュード)	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
長野盆地西縁断層帯(注22)	7.4~7.8	771) or long on a) or lord on) T) T ! 0 0 1		800年-2,500年程度
(飯山一千曲区間)	程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.07-0.2	1847年善光寺地震
屏風山•恵那山-猿投山断層帯		771		\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\) or horizon) - T - T - C		40,000年程度
(猿投-高浜断層帯)	7.7程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.4	約14,000年前頃
	6ml.							約5,000年-7,100年
牛首断層帯	7.7程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.2	11-12世紀
柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯								約2,300年-2,700年
(主部/ <i>北部</i>)	7.6程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.2	17世紀頃
								約20,000年-27,000年
日出生断層帯 ^(注11)	7.5程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05 - 0.4	————————————————————————————————————
								約2,600年-4,100年
関谷断層	7.5程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.08-0.3	14世紀-17世紀
								約4,500年-6,000年
(南部)	7.5程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.2	1185年の地震
木曽山脈西縁断層帯					1			約6,400-9,100年
(主部/北部)	7.5程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.08-0.1	13世紀頃
								8,000年-12,000年程度
双葉断層 ^(注5)	6.8~7.5程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	約2400年前-2世紀
 山田断層帯	 7.4程度		-					約10,000年-15,000年
(郷村断層帯)	1.4住及もしくはそれ以上	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.006-0.009	1927年北丹後地震
	もしくはそれ以上							, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
濃尾断層帯	7.4程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.008-0.009	約14,000年-15,000年
(主部/梅原断層帯)			-					1891年濃尾地震
会津盆地西縁・東縁断層帯	7.4程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04-0.06	約7,400年-9,700年
(会津盆地西縁断層帯)								1611年会津地震
高田平野断層帯	7.3程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06-0.1	2,200年-4,800年程度
(高田平野西縁断層帯)								1751年の地震
北伊豆断層帯	7.3程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06	約1,400年-1,500年
								1930年北伊豆地震
濃尾断層帯	7.3程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04-0.06	約2,100年-3,600年
(主部/根尾谷断層帯)								1891年濃尾地震
長尾断層帯(注43)	7.3程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.01-0.04	概ね30,000年程度
X/-11-41/11 113	,—,, ~	,						8世紀以後-16世紀以前
木津川断層帯	7.3程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.007-0.04	約4,000年-25,000年
	,—,, ~							1854年伊賀上野地震
小郡断層	7.3程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.01-0.02	約23,000年-25,000年
V - FIFE / / / /		2, . ,						約500年前以後-約300年前以前
水縄断層帯	7.2程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1	14,000年程度
		2, ,			, , , , , , , ,	, , , , , , , ,		679年筑紫地震
横手盆地東縁断層帯	7.2程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04	3,400年程度
(北部)		2,4,		(31,31070	(3.13.07)	(61)6167		1896年陸羽地震
湖北山地断層帯	7.2程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%~	0.2-0.3	約3,000年-4,000年
(北西部)		2,4,		15,50%	15.15.070	0.001%	3.2 0.0	11-14世紀
三方•花折断層帯	7.2程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06-0.09	約3,800年-6,300年
(三方断層帯)		2,4,		15,150/0	,5.,15.070	,5.,5.070		1662年の地震
伊勢湾断層帯	7.2程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.03-0.1	10,000年-15,000年程度
(主部/ <i>北部</i>)				15150/0	,54,54070	,5.15.070	5.55 0.1	概ね1000年前-500年前
鹿野-吉岡断層	7.2程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.008	4,600年-9,200年程度
ルロウ ロ [MB] /目				15150/0	15.15.070	15.15.070	-0.02	1943年鳥取地震
能代断層帯	7.1程度以上	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.2	1,900年-2,900年程度
	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・			(A(AU/II	15150/0	101000	0.1 0.2	1694年能代地震
六甲·淡路島断層帯	7.1程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.009-0.01	1,800年-2,500年程度
(主部/ <i>淡路島西岸区間</i>)	1.17生/又	4747		1414U/I	15150/0	13130/0	0.000 0.01	1995年兵庫県南部地震
庄内平野東縁断層帯	7.1程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.08-0.1	1,000年-1,500年程度 もしくはそ れ以下
(北部)	1.1在皮	ムノイツ		γ ス γ ス 0%	(み(み0%	(み(み0%	もしくはそれ以上	1894年庄内地震
六日町断層帯	7 1 和 🛱	クランノカ) 7) 7 " ^ ")±)±°00′).T.).T'00'	0.004	約3,200-4,000年 もしくはそ れ以下
(<i>北部</i>) (ケース2) ^(注18)	7.1程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	もしくはそれ以上	2004年中越地震
	7 110 Hz	751		· - · - · - · ·	1	ton tond		約20000年-30000年
宇美断層	7.1程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2以下	 約4500年前以後

断層帯名	長期評価で 予想 した 地震規模	我が国の主 活断層におい 相対的評価 ⁽	ける	地震発生	主確率 ^{(注1})	地震後 経過率	平均活動間隔
(起震断層 <i>/ 活動区間</i>) 【	地辰税候 (マグニチュード)	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
綾瀬川断層(注35)	7.0程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.3	45,000年-71,000年程度
(鴻巣-伊奈区間)	7.0往及	LJVJ		1313070	(4(40)	1414070	0.1 0.5	約15,000年前以後-約9,000年前以前
布田川断層帯(注9)	7.0程度	Zランク ^(注41)		ほぼ0% ^(注41)	ほぼ0% ^(注41)	ほぼ0% ^(注41)	ほぼ0 ^(注41)	8,100年-26,000年程度(注42)
(布田川区間)	7.07至/交	とノンソ		(A(AU))	(4)40%	1414U/0	14140	平成28年(2016年)熊本地震 ^(注41)
雫石盆地西縁-真昼山地東縁断層帯	6.7~7.0程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.004-0.02	約6,300年-31,000年
(真昼山地東縁断層帯/北部)	0.1 1.0 至 及	2707		134307	1313.070	100000	0.001 0.02	1896年陸羽地震
中央構造線断層帯(注6)	6.8程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	約6,000年-7,600年
(金剛山地東縁区間)		<i>L</i>) v)		1313.070	13101070	13.13.0%		1世紀以後-3世紀以前
湖北山地断層帯	6.8程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05-0.09	概ね7,000年程度
(南東部)		<i>L</i>) v)		(31,3107)	13101070	151151678		15-17世紀
濃尾断層帯	6.8程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05-0.06	約2,200年-2,400年
(温見断層/北西部)	0.07至/文	2707		131307	13(3.0%	1343.070	0.00 0.00	1891年濃尾地震
山崎断層帯	6.7程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.3	6,500年程度
(草谷断層)	0.17至/文	<i>L) •)</i>		1818070	1313070	1343070	0.1 0.0	4-12世紀
六甲·淡路島断層帯	6.6程度	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04-0.2	5,000年-10,000年程度
(先山断層帯)	0.0/至/交	2707		1212011	1212011	1414070	0.04 0.2	11世紀-17世紀初頭
筒賀断層	7.8程度	Xランク		不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
同 真 例 / 值	1.0住及	A)V)		不明一	个明	个明 —	小明	不明
標津断層帯	7.7程度以上	Xランク		不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
宗	1.1往及以上	A)V)		不明 "一	不明 (===)	不明 (==-)	个明 ****	不明
菊川断層帯 ^(注36)	7.7程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(<i>北部区間</i>)	1.1住及	AJZO		个明(1945)	个明 (*****	个明(===)	个明 (1997)	約14,000年前以後
柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯	7.6程度	Xランク		不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(主部/ <i>南部</i>)	7.0往及	A)V)		不明 "一	不明 (===)	不明 (==-)	个明 ****	約4,900年前-15世紀
西山断層帯(注32)	7.649 庄	Vランカ		一口 (注23)	→ □□ (注23)	→ n □ (注23)	→ п (注23)	不明
(西山区間)	7.6程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明(注23)	約13,000年前以後-概ね2,000年前以前
西山断層帯(注32)	7.5和帝	Vニンカ		→ np (注23)	→ np (注23)	一口(注23)	→ nn (注23)	不明
(大島沖区間)	7.5程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明(注23)	約20,000年前以後
増毛山地東縁断層帯・沼田-砂川付近の断層帯	7.542 庄	Vランカ		一口 (注23)	→ □□ (注23)	→ n □ (注23)	→ п (注23)	不明
(沼田ー砂川付近の断層帯)	7.5程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明
卢克杰 山戸港水戸井 (注39)	7.542 庄	Vランカ		一口 (注23)	→ □□ (注23)	→ n □ (注23)	→ п (注23)	不明
広島湾-岩国沖断層帯 ^(注39)	7.5程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
土臣湘縣屋	7.540 庄	Vランカ		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
大原湖断層	7.5程度	Xランク		不明(===)	不明 (===)	不明 (==-)	个明 、	不明
木曽山脈西縁断層帯	7.44年度	Xランク		一口 (注23)	一口 (注23)	プロ (注23)	不明(注23)	不明
(清内路峠断層帯)	7.4程度	AJZO		不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	个明 (1888)	不明
山田断層帯	7.49年	Vランカ		一口 (注23)	→ п □ (注23)	→ n □ (注23)	→ np (注23)	不明
(主部)	7.4程度	Xランク		不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	約3,300年前以前
雲仙断層群	7.0和座以上	Vニンカ		→ np (注23)	一口(注23)	一口(注23)	一口(注23)	不明
(北部) ^(注24)	7.3程度以上	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	約5,000年前以後
西山断層帯(注32)	7.0和库	ソニンカ				一口(注23)	一口(注23)	不明
(嘉麻峠区間)	7.3程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
伊那谷断層帯	7 014	ソニン・カ		(\$±29)	(½±22)	(\$\frac{1}{2} \text{22})	(\$±22)	不明
(南東部)	7.3程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
濃尾断層帯	7 OTH ##	VEV. A		(>+99)	(27:99)	(27-02)	(\$292)	不明
(武儀川断層)	7.3程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
	E OTHER	77 T. L		(24:00)	(24-00)	(24-00)	(>+aa)	不明
長良川上流断層帯	7.3程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
	= 0.4H H			(Mran)	(Nran)	(Naga)	(2)-00)	不明
長者ヶ原-芳井断層	7.3程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
阿寺断層帯	F 04H H	4 y mar. 1.		(Mon)	(3)-00)	(2)-pg)	(20-00)	不明
(白川断層帯)	7.3程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 (注23)	不明(注23)	不明
横手盆地東縁断層帯				/22>	/ NA- c = N	/ 55 5	/54	不明
(南部)	7.3程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明(注23)	約6,000年前-5,000年前以後
中央構造線断層帯(注6)						7.5 - ·		不明
(五条谷区間)	7.3程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 (注23)	不明(注23)	約2200年前以後-7世紀以前
津軽山地西縁断層帯(注25)								不明
(南部)	7.1~7.3程度	Xランク		不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明(注23)	1766年の地震
/	1	1		ı l		<u> </u>		· · ·

断層帯名	長期評価で 予想 した 地震担構	我が国の主 活断層におり 相対的評価	ナる	地震発生	生確率 ^{(注1})	地震後 経過率	平均活動間隔
(起震断層 <i>/活動区間</i>) 	地震規模 (マグニチュード)	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
津軽山地西縁断層帯(注25)	6.8~7.3程度	Xランク		不明 (注23)	不明 (注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
(北部) 宮古島断層帯	7.2程度							1766年の地震 不明
百百扇剛膚術 (中部)	1.2 住皮もしくはそれ以上	Xランク		不明(注23)	不明 (注23)	不明 (注23)	不明(注23)	不明
布田川断層帯 ^(注9)	7.2程度以上	Xランク		不明 ^(注23)	不明 (注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(宇士半島北岸区間)	1.2性及以上	AJZJ		不明	不明 "一"	不明 ——	个明 ——	不明
鴨川低地断層帯(注26)	概ね7.2	Xランク		不明 ^(注23)	不明(注23)	不明 (注23)	不明(注23)	不明
	~ _ ~			(2000)	(200	(%-00)	(>	不明
(霧訪山-奈良井断層帯)	7.2程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
阿寺断層帯	7.2程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
(佐見断層帯) 柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯								不明不明
(浦底一柳ヶ瀬山断層帯)	7.2程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
三方•花折断層帯	7.2程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(花折断層帯/北部)(注27)	1.2/主/文	Ayyy		7193	71.91	71.001	71.601	1662年の地震
三峠·京都西山断層帯 (上林川断層)	7.2程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
岩国-五日市断層帯(注37)	7 OT 11:	V-V-V-b		(3+99)	(3+22)	(37-99)	· · · · (>> · · ·)	不明
(五日市断層区間)	7.2程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	7世紀以後-12世紀以前
地福断層	7.2程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
								不明不明
日向峠-小笠木峠断層帯	7.2程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
岩国-五日市断層帯(注37)	7.1程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(己斐断層区間)	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	71,70		11.01	.1.991	-1-91	-1-91	約23,000年前以前
周防灘断層帯 ^{注38)} (<i>秋穂沖断層区間</i>)	7.1程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
福井平野東縁断層帯	7 1 40 #	VEVA		(3±23)	(½±23)	(3293)	(注23)	不明
(西部)(注28)	7.1程度	Xランク		不明 ^(注23)	不明(注23)	不明 (注23)	不明 ^(注23)	1948年福井地震
濃尾断層帯	7.1程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(揖斐川断層帯) 雲仙断層群								1-10世紀 不明
(南東部)(注24)	7.1程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	約7,300年前以後
屏風山•恵那山-猿投山断層帯	7.1程度	Xランク		不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
(赤河断層帯) 高山・大原断層帯								不明不明
(猪之鼻断層帯)	7.1程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
雫石盆地西縁-真昼山地東縁断層帯	6.9~7.1程度	Xランク		不明 ^(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(真昼山地東縁断層帯/南部)	0.9~7.1作之	A)		不明 …	小明一	不明一	不明 一	不明
綾瀬川断層 ^(注35) (<i>伊奈-川口区間</i>)	7.0程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明不明
	= 04B #	***		(2)hoo)	(%)(00)	(2000)	(Nega)	不明
身延断層	7.0程度	Xランク		不明 ^(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
濃尾断層帯	7.0程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
(温見断層/南東部) 濃尾断層帯								不明不明
(主部/三田洞断層帯)	7.0程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
警固断層帯	7.0程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
(北西部)(注29)	1.0/王/又	11/4/		(1.01	1.61	1193	1191	2005年福岡県西方沖の地震
布田川断層帯 ^(注9) (<i>宇土区間</i>)	7.0程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明(注23)	不明
菊川断層帯 ^(注36)	 6.9程度	Vランカ		→ pp (注93)	プロロ (注93)	プロロ (注23)	プロ (注93)	不明
(南部区間)	もしくはそれ以上	Xランク		不明 ^(注23)	不明(注23)	不明 (注23)	不明 ^(注23)	不明
宮古島断層帯	6.9程度 もしくはそれ以上	Xランク		不明 (注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明
(西部) 零石盆地西縁-真昼山地東縁断層帯								不明不明
(雫石盆地西縁断層帯)	6.9程度	Xランク		不明(注23)	不明(注23)	不明 (注23)	不明(注23)	約2,800年前-14世紀

断層帯名 (起震断層/ <i>活動区間</i>)	長期評価で 予想 した 地震規模	我が国の主 活断層にお 相対的評価 ⁽	ける		地震発生	生確率(注))	地震後経過率	平均活動間隔
	(マグニチュード)	ランク	色	304	丰以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
甑断層帯	6.9程度	Xランク			不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 (注23)	不明 ^(注23)	不明
(上甑島北東沖区間)	0.3作五/支	AJVJ			个奶	个奶	1199	个明	不明
長野盆地西縁断層帯(注22)	6.8程度	Xランク			不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 (注23)	不明
(麻績区間)	0.0往及	AJZJ			个明	个明 一	个明 一	个明	不明
日奈久断層帯 ^(注9)	6.8程度	Xランク			不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	一口 (注23)	不明
(高野一白旗区間)	0.0往及	AJZJ			个明 一	个明 一	个明 一	不明(注23)	約1,600年以後-約1,200年前以前
柳ヶ瀬・関ヶ原断層帯	6.6程度	Xランク			不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(主部/ <i>中部</i>)	0.0往及	AJZJ			个明	个明 一	个明 一	个明	約7,200年前-7,000年前
野坂•集福寺断層帯	6.5程度	Xランク			不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(集福寺断層)	0.0往及	AJZJ			个明 一	个明 一	个明 一	个明	不明
三浦半島断層群	6.1程度	Xランク			不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明(注23)	不明
(南部)	もしくはそれ以上	AJZJ			个明	个明 一	个明 一	个明 一	約26,000年前-22,000年前
折爪断層 ^(注30)	(最大7.6程度)	Xランク			不明 ^(注23)	不明 ^(注23)	不明 (注23)	不明 ^(注23)	不明
が NAT 間	(取八八0性)	AJZJ			个明 一	个明	个明	个明 —	不明
国府津一松田断層帯(注34)	_		_			_	_	_	(分岐断層)

(参考) 富士川河口断層帯の長期評価の概要 (注31)

(駿河トラフで発生した海溝型地震に伴って活動したと考える場合の地震発生確率等)

断層帯名 (起震断層 <i>/活動区間</i>)	長期評価で 予想 した 地震規模	我が国の主 活断層におい 相対的評価 ⁽	ける	地震発生	地震発生確率(注1)			平均活動間隔
	(マグニチュード)	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
富士川河口断層帯	8.0程度	S*ランク		我が国の 10%~18%	20%~30%	30%~50%	0.9-2より大	約150年-300年
(ケースa)	6.0任及	3 本 ノンソ		層の中で	20% - 30%	30% ~ 30%		13世紀後半以後-18世紀前半以前
富士川河口断層帯	8.0程度	S*ランク		は 高い グ ループに 2%~11%もしく	3%~20%もしく			約1,300年-1,600年
(ケースb)	0.0任发	3*ランク		属するはそれ以下	はそれ以下	はそれ以下	はそれ以下	6世紀以後-9世紀以前、もしくはそれ以後

(参考)活断層ではないと評価されたもの (注40)

	(2) (HAITH GOOD CHILD COO
東京湾北縁断層	活断層ではないと判断される。
岐阜——宮断層帯	活断層ではないと判断される。
荒川断層	活断層ではないと判断される。
幌延断層帯	活断層ではないと判断される。

- 注1: 確率値は有効数字 1 桁で記述している。ただし、30年確率が10%台の場合は2桁で記述する。また「ほぼ0%」とあるのは、 10^{-3} %未満の確率値を表す。
- 注2: 最新活動(地震発生)時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。値は0.1単位で記述し、0.1未満の場合は有効数字1桁で記述している。また「ほぼ0」とあるのは、10⁻³未満の値を表す。
- 注3: 活断層における今後30年以内の地震発生確率が3%以上を「S ランク」、 $0.1\sim3\%$ を「A ランク」、0.1%未満を「Z ランク」、不明(すぐに地震が起きることが否定できない)を「X ランク」と表記している。地震後経過率(注2)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している。
- 注4: 花輪東断層帯及び櫛形山脈断層帯は、長期評価の結果長さが主要活断層帯の条件である20kmに満たないとされたが、詳細な調査が行われていることから主要活断層帯に残すこととした。
- 注5: 平成23年 (2011年) 東北地方太平洋沖地震に伴い、糸魚川-静岡構造線断層帯(牛伏寺断層)、立川断層帯、双葉断層、三浦半島断層群、阿寺断層帯 (主部/北部(萩原断層)) では、地震発生確率が表の値より高くなっている可能性がある。
- 注6: 中央構造線断層帯については、これまで6つの区間に分かれて活動するとして評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2011)。その後、同断層帯及び延長部の分布に関する新たな知見に基づき、これまでの各区間を9つの区間に再整理し、また、西端を九州側へ延長した豊予海峡
 由布院区間を追加して、計10の区間の断層帯として評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017a)。また、これらは1つの断層帯と して同時に活動する可能性もある。その場合はマグニチュード8.0程度もしくはそれ以上の地震が発生し、その長期確率は、10の区間が個別に活動する 長期確率を超えることはないと評価されている。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2011):「中央構造線断層帯の評価(一部改訂)」,88p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017a):「中央構造線断層帯の長期評価(第二版)」,162p.

- 注7: 境峠・神谷断層帯(主部)は、最新活動時期を約4千9百年前以後-約2千5百年前以前、1つ前の活動を約7千7百年前以後-約6千7百年前以前の可能性があるとし、これら過去2回の活動の間隔を基に平均活動間隔(約1千8百-5千2百年)を求めている。ただし、最新活動時期の年代幅が大きく、またそのため、平均活動間隔に関しても十分に時期を絞り込むことができなかった。したがって、これらの値から算出した地震後経過率(0.5-2より大)及び将来の地震発生確率(今後30年:0.02%-13%)は、いずれも大きく幅を持たせた評価となっていることに留意する必要がある。
- 注8: 高田平野断層帯(高田平野東縁断層帯)の最新活動時期は、約3500年前以後、19世紀以前と推定されている。19世紀以前であることは、1847年の地震 以降に本断層帯付近で大きな被害地震が起こっていないことに基づいていることから、最新活動時期を3500年前以後、西暦1847年以前として地震発生 確率を算出している。
- 注9: 布田川断層帯及び日奈久断層帯については、これまで布田川・日奈久断層帯として、北東部・中部・南部に3区分して評価を行っていた(地震調査研究 推進本部地震調査委員会,2002)。地震調査研究推進本部地震調査委員会(2013a)は、その後に得られた新たな知見に基づき、布田川断層帯と日奈久 断層帯に二分し、さらに布田川断層帯を布田川区間・宇土区間・宇土半島北岸区間、日奈久断層帯を高野-白旗区間・日奈久区間・八代海区間に区分し て評価を行った。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2002):「布田川・日奈久断層帯の評価」,35p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2013a):「布田川断層帯・日奈久断層帯の評価(一部改訂)」,66p. 注10: 京都盆地-奈良盆地断層帯南部は、評価の結果、奈良盆地東縁断層帯と称することとしたので、ここでは奈良盆地東縁断層帯と記述した。

注11: 日出生断層帯、万年山-崩平山断層帯は、これまで別府-万年山断層帯の一部として評価していた。その後、中央構造線断層帯の再評価(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017a)により、別府-万年山断層帯の構成断層を見直し、日出生断層帯、万年山-崩平山断層帯としてそれぞれ評価した (地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017b,2017c)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2005): 「別府-万年山断層の評価」, 73p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017a): 「中央構造線断層帯の長期評価(第二版)」, 162p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017b): 「日出生断層帯の長期評価(第一版)」, 25p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017c): 「万年山ー崩平山断層帯の長期評価(第一版)」, 28p.

- 注12: 琵琶湖西岸断層帯(北部)は、最新活動時期は約2800年前以後、約2400年前以前と求められているが、平均活動間隔約1000年-2800年と比較して最新活動時期からの経過時間が長くなる可能性が考えられる。そのため、地震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めていない。なお、通常のBPT分布を用いた場合、30年確率のとり得る範囲は3%-20%、地震後経過率は0.9-2.8となる。また、この評価とは別に、琵琶湖西岸断層帯(北部)の最新活動時期を7世紀中葉以降とする考えもある。この考えに従うと、平均活動間隔が大幅に短くなり、将来の地震発生確率も今後30年以内、50年以内、100年以内の地震発生確率は、それぞれ2%-6%、4%-10%、7%-20%と幅がさらに大きくなり、最大値が大きくなることに注意が必要である。
- 注13: 邑知潟断層帯は、最新活動時期が十分絞り込まれておらず、通常の手法では平均活動間隔を求めることができない。そこで、過去の活動時期から、約4900年前-9世紀に3回の活動があったとして平均活動間隔を求めている。また、地震発生確率の計算に際しては、通常のBPT分布を用いることができるだけの信頼度がないと考えて、ポアソン過程で求めた。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注14: 曽根丘陵断層帯は、最新活動時期が約10000年前以後と求められているが、平均活動間隔2000-3000年に対して十分に絞り込まれていない。このため、 地震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めてない。
- 注15: 最新活動の時期が特定できていないため、通常の活断層評価で用いている計算方法(地震の発生確率が時間とともに変動するモデル:BPT分布モデル)ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方(ポアソン過程)により長期確率を求めている。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注16: 長町-利府線断層帯は、最新活動時期が約16000年前以後と求められているが、平均活動間隔3000年に対して十分に絞り込まれていない。このため、地 震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めてない。
- 注17: 雲仙断層群(南西部/南部)は、最新活動時期が約4500年前-16世紀と求められているが、平均活動間隔2100-6500年に対して十分に絞り込まれていない。このため、地震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めてない。
- 注18: 六日町断層帯(北部)については、平成16年(2004年)新潟県中越地震を最新活動としない場合(ケース1)とこれを最新活動とする場合(ケース2)の2つの場合分けをして、評価を行った。ケース1では、最新活動時期が約4900年前-16世紀と十分に絞り込めていない。このため、1つ前の活動(約8000-6400年前)以降に1回の活動があったとして、活動間隔の下限(3200年)を求めた。地震発生確率の計算に際しては、通常のBPT分布を用いることができるだけの信頼度がないと考えて、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めていない。
- 注19: 十日町断層帯(東部)では、約3800-3200年前に活動した可能性があるが、これを最新活動と限定できなかったことから、不明としている。そのため、地震後経過率を求められない。
- 注20: 十勝平野断層帯 (光地園断層) は、最新活動時期が十分絞り込まれておらず、通常の手法では平均活動間隔を求めることができない。ここでは、過去の活動時期から、約21000年前以後に2回の活動があったとして平均活動間隔を求めている。また、地震発生確率の計算に際しては、通常のBPT分布を用いることができるだけの信頼度がないと考えて、ポアソン過程で求めた。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注21: 伊那谷断層帯(主部)の最新活動時期は、14世紀以後、18世紀以前と推定されている。18世紀以前であることは、1725年の高遠の地震以降に本断層帯付近で大きな被害地震が起こっていないことに基づいていることから、最新活動時期を西暦1300年以後、西暦1725年以前として地震発生確率を算出している。
- 注22: 長野盆地西縁断層帯については、これまで飯山一千曲区間を単一の活動区間として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2001)。その後、同断層帯延長部の分布に関する新たな知見に基づき、飯山一千曲区間の南方延長に麻績区間を新たに追加して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2015)。従来の名称「信濃川断層帯(長野盆地西縁断層帯)」(地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2015)と称することとしたので、ここでは長野盆地西縁断層帯と記述した。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2015):「長野盆地西縁断層帯(信濃川断層帯)の長期評価(一部改訂)」, 34p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2001):「信濃川断層帯(長野盆地西縁断層帯)の評価」, 22p.

注23: 平均活動間隔が判明していない等の理由より、地震発生確率及び地震後経過率を求めることができない。

- 注24: 雲仙断層群(北部、南東部)は、平均活動間隔が求められていないため、地震発生確率は不明となっている。 しかし、信頼度が低い情報ながら、これらの断層帯における平均変位速度は1m/千年程度に達する可能性が指摘されている。このため、これらの断層帯においては平均活動間隔が最新活動時期からの経過時間よりも短い可能性もあり得るため、注意が必要である。
- 注25: 津軽山地西縁断層帯は、北部及び南部に分かれると評価されている。平均活動間隔が不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動 時期が1766年であり、地震後経過年数が短いため、近い将来の地震発生確率はごく小さいと考えられる。なお、最新活動と考えられる地震の規模が断 層帯の長さに比べて大きいため、発生する地震の規模は幅を持った値としている。
- 注26: 鴨川低地断層帯に関しては、活断層であるかどうかの確実な証拠に乏しく、活断層としての存在そのものについて疑問視した調査結果も報告されている。よって、今後、本断層帯の活動時期や活動性に関する確実な資料を得る必要がある。
- 注27: 三方・花折断層帯 (花折断層帯/北部) は、平均活動間隔が不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が1662年の地震である可能性があることから、近い将来の地震発生可能性は小さいと考えられる。
- 注28: 福井平野東縁断層帯(西部)は、平均活動間隔が不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が1948年であり、地震後経過年 数が短いため、近い将来の地震発生確率はごく小さいと考えられる。
- 注29: 警固断層帯(北西部)は、平均活動間隔などが不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が2005年であり、地震後経過年数が短いため、近い将来の地震発生確率はごく小さいと考えられる。なお、断層面の位置・形状や活動履歴の検討をするための地形学・地質学的な資料が得られていないことから、長期評価は主に地震観測結果などの地球物理学的な資料に基づいて行った。
- 注30: 折爪断層は、将来の活動可能性を明確にするために必要な資料が十分得られていない。鮮新世の地層を大きく変位させているので、第四紀に活動した 断層であることはほぼ確かであると考えられているが、第四紀後期に活動を繰り返していることを示す確かな証拠はこれまで発見されておらず、特 に、北部の辰ノロ撓曲においては第四紀後期の活動性は衰えている可能性もある。このため、発生する可能性がある地震の規模についても、便宜的に 最大値を記載しているものの、この値は断層全体が一つの区間として活動した場合の試算値に過ぎないことに注意する必要がある。
- 注31: 富士川河口断層帯については、駿河トラフで発生した海溝型地震に伴って活動してきたと考えられる。そのため、他の活断層の評価と一概に比較できないことから、別途、参考として記載した。富士川河口断層帯については、その過去の活動時期などについて、2つの可能性が考えられることから、2つのケースに分けて評価している。ケースaの場合、富士川河口断層帯は駿河トラフで発生する海溝型地震と連動して同時に活動し、活動の際には浮島ヶ原地区で沈水現象が生じると考えられる、と評価した。また、ケースbの場合、浮島ヶ原地区で認められた沈水現象については、富士川河口断層帯の活動を伴わない海溝型地震の履歴を表している可能性があり、富士川河口断層帯の過去の活動時期は、断層近傍の地表で変位が生じた時期に基づいて推定するべきであるとして評価した。いずれのケースであっても、発生する地震の規模は、駿河トラフで発生する海溝型地震と連動して同時に活動する場合の規模を推定している。なお、富士川河口断層帯の陸上部で認められている断層が単独で活動する可能性もあり、その場合、マグニチュード7.2程度の地震が発生する可能性がある。また、将来確率について、ケースaの場合、最新活動時期からの経過時間が平均活動間隔の2倍を超えているため、通常の活断層評価で用いている計算

また、特米権率について、ケースaの場合、最新活動時期からの経過時間が平均活動間隔の2倍を超えているため、通常の活動層評価で用いている計算 方法(地震の発生確率が時間とともに変動するモデル:BPT分布モデル)ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方(ポアソン過程)に より長期確率を求めている。なお、活断層の相対的評価については、他の活断層帯と比較した際に今回評価した地震発生確率をそのまま当てはめた場 合にはどうなるかを参考までに示したということに留意されたい。 注32: 西山断層帯については、これまで単一の活動区間として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2004)。その後、同断層帯延長部 の分布及び活動履歴に関する新たな知見に基づき、大島沖区間・西山区間・嘉麻峠区間の3区間に区分して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調 香委員会, 2013b)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2004) : 「西山断層帯の評価」, 11p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2013b): 「西山断層帯の評価(一部改訂」, 32p.

注33: 糸魚川-静岡構造線断層帯については、これまで北部・中部・南部に3区分して評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会、1996)。地 震調査研究推進本部地震調査委員会(2015)は、その後に得られた新たな知見に基づき、北部・中北部・中南部・南部の4つの区間に再区分して評価を

地震調査研究推進本部地震調査委員会(1996):「糸魚川-静岡構造線活断層系の調査結果と評価」, 10p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2015) : 「糸魚川-静岡構造線断層帯の長期評価(第二版)」, 60p.

注34: 塩沢断層帯・平山-松田北断層帯・国府津-松田断層帯については、これまで神縄・国府津-松田断層帯として国府津-松田断層帯から塩沢断層まで を一連の断層帯として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2009)。その後、国府津-松田断層帯については、プレート境界か らの分岐断層と判断し、相模トラフ沿いのM8クラスの地震の何回かに一回の割合で同時に動くと評価した(地震調査研究推進本部地震調査委員会、 2014)。また、地震調査研究推進本部地震調査委員会(2015)は、断層帯を構成する断層やそれらの位置・形状、周辺の地下構造、活動履歴に関する 新たな知見に基づき、神縄断層を活断層ではないと判断し、塩沢断層帯を伏在断層として南西方向へ延長する等の評価を行った。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2009):「神縄・国府津-松田断層帯の評価(一部改訂)」, 35p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2014) : 「相模トラフ沿いの地震活動の長期評価 (第二版) について」, 81p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2015):「塩沢断層帯・平山ー松田北断層帯・国府津-松田断層帯(神縄・国府津-松田断層帯)の長期

評価(第二版)」, 55p.

注35: 深谷断層帯・綾瀬川断層については、これまで関東平野北西縁断層帯として平井-櫛挽断層帯・主部の2区分、また、元荒川断層帯として北部・南部に 2区分して評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2000、地震調査研究推進本部地震調査委員会,2005)。地震調査研究推進本部地 震調査委員会(2015)は、その後に得られた新たな知見に基づき、関東平野北西縁断層帯の平井-櫛挽断層帯から主部の一部までを深谷断層帯、ま た、元荒川断層帯の北部(関東平野北西縁断層帯の一部)を綾瀬川断層の鴻巣-伊奈区間、元荒川断層帯の南部を伊奈-川口区間として評価を行っ た。綾瀬川断層南部(伊奈-川口区間)は、元荒川断層帯の南部に対応しこれまで活断層ではないとされていた(地震調査研究推進本部地震調査委員 会, 2000) が、新たな知見により活断層の可能性を認定した(地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2015)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2000):「元荒川断層帯の評価」,15p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2005): 「関東平野北西縁断層帯の長期評価」,34p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2015): 「深谷断層帯・綾瀬川断層(関東平野北西縁断層帯・元荒川断層帯)の長期評価(一部改

訂)」, 56p.

注36: 菊川断層帯については、これまで中部区間を単一の活動区間として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2003)。その後、同断 層帯延長部の分布に関する新たな知見に基づき、菊川断層帯の北西端を北西の沖合へ延長した北部区間を追加し、また、菊川断層帯の南東端を南東へ 延長した南部区間を追加して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2016)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2003):「菊川断層帯の評価」, 10p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2016):「菊川断層帯の長期評価(一部改訂)」,28p.

注37: 岩国-五日市断層帯については、これまで岩国断層帯、五日市断層帯のそれぞれを別の断層帯として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調 査委員会,2004a,2004b)。その後、岩国断層帯、五日市断層帯のそれぞれの延長部の分布に関する新たな知見に基づき、五日市断層帯についてはそ の南端を海域へ延長して五日市断層区間とし、また、岩国断層帯についてはその北端を海域へ延長して岩国断層区間とし、さらに、己斐断層区間を追 加して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2016)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2004a):「五日市断層帯の評価」, 16p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2004b):「岩国断層帯の評価」,15p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2016):「岩国-五日市断層帯(岩国断層帯・五日市断層帯)の長期評価(一部改訂)」,29p.

注38: 周防灘断層帯については、これまで宇部沖断層群として周防灘断層群主部、秋穂沖断層帯、宇部南方沖断層帯に区分して評価していた(地震調査研究 推進本部地震調査委員会,2008)。その後、これまで断層群としていたものを陸域の新たな知見や連続性などから整理し、周防灘断層帯主部区間、秋 穂沖断層区間の2つに区分して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2016)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2008):「宇部沖断層群(周防灘断層群)の評価」, 29p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2016): 「周防灘断層帯 (周防灘断層群・宇部沖断層群) の長期評価 (一部改訂)」, 28p.

注39: 安芸灘断層帯、広島湾ー岩国沖断層帯については、これまで安芸灘断層群として評価していた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2009)。その後、これまで断層群としていたものを新たな知見により、断層の位置関係や連続性を再整理し、安芸灘断層帯、広島湾ー岩国沖断層帯の2つの断層帯に 区分して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2016)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2009):「安芸灘断層群の評価」,22p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2016):「安芸灘断層帯・広島湾ー岩国沖断層帯(安芸灘断層群)の長期評価(一部改訂)」,28p.

注40: かつて活断層であると考えられていたが、地震調査研究推進本部地震調査委員会が評価した結果、活断層でないとされたものを掲載している。

注41: 布田川断層帯布田川区間については、平成28年(2016年)熊本地震で活動した(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2016ab)として評価を行っ

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2016a):「平成28年4月16日熊本県熊本地方の地震の評価」(2016年4月16日公表) 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2016b):「平成28年(2016年)熊本地震の評価」(2016年5月13日公表)

注42: 布田川断層帯布田川区間の平均活動間隔については、暫定的に平成28年(2016年)熊本地震発生前の評価(地震調査研究推進本部地震調査委員会,

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2015) : 「布田川断層帯・日奈久断層帯の評価 (一部改訂)」, 6p.

注43: 長尾断層帯については、これまで長尾断層、大川撓曲、鮎滝断層に区分していた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2005)。その後、同断層帯 延長部の分布に関する新たな知見に基づき、長尾断層帯の西端を西へ延長した部分を追加して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,

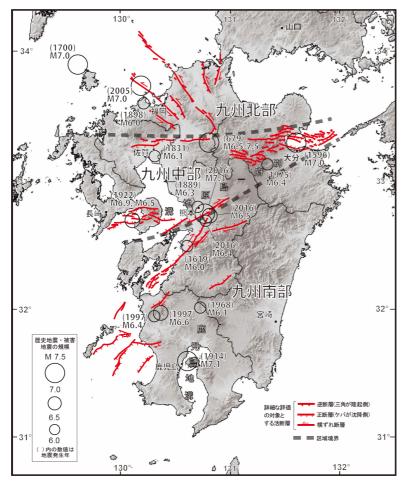
地震調査研究推進本部地震調査委員会(2005):「長尾断層帯の評価」, 16p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017d):「長尾断層帯の長期評価(一部改訂)」,21p.

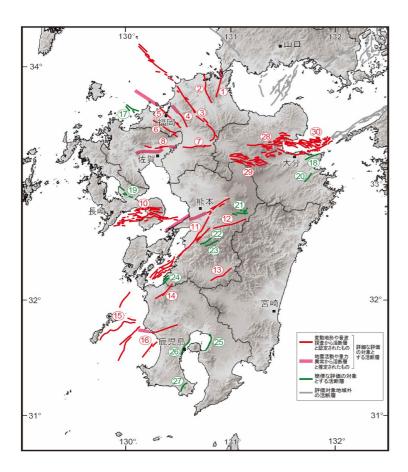
注44: 花輪東断層帯は、最新活動時期が約15000年前以後と求められているが、平均活動間隔3000年-5000年程度に対して十分に絞り込まれていない。このた め、地震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めてない。

1-2. 九州地域の活断層の長期評価の概要(算定基準日 平成30年(2018年)1月1日)

九州地域の活断層の長期評価についての詳細は、活断層の地域評価のページ (http://www.jishin.go.jp/evaluation/long_term_evaluation/regional_evaluation/kyushu-detail) を参照ください。



九州地域において詳細な評価の対象とする活断層のずれの向きと種類及び九州地域で発生した歴史地震・被害地震の震央



九州地域(評価対象地域)において評価対象とした活断層の分布

<活断層の地域評価とは>

地震調査研究推進本部では、社会的・経済的に大きな影響を与えると考えられ、マグニチュード(M7)以上の地震を引き起こす可能性のある97の主要活断層帯(長さが20km以上の活断層帯)について、個別に長期評価を行ってきました。

しかし近年、M7未満の地震や主要活断層帯以外の地震によっても被害が生じていることから、ある地域の地震危険度を検討するためには、個別の活断層を評価するだけでなく、その周囲の活断層も含めて総合的に評価する必要があることが明らかになってきました。

これを受けて、地震調査研究推進本部では、

- 対象地域に分布する活断層で発生する地震を総合的に評価する「地域評価」の導入
- ・ 評価対象とする活断層の見直し
- ・ 地表の長さが短い活断層における、地質や地球物理学的 情報を用いた地下の震源断層の位置・形状(長さなど) の評価

等を含めた新たな評価手法をとりまとめました(活断層の 長期評価手法(暫定版)、平成22年11月25日)。

こうした新たな評価手法に基づき、陸域及び沿岸海域に分布し、M6.8以上の地震を引き起こす可能性のある活断層について、対象とする地域ごとに総合的に評価したものを「活断層の地域評価」と呼んでいます。

	詳細な評価の対象とする活断層
1.	小倉東(こくらひがし)断層
2.	福智山断層帯
3.	西山断層帯
4.	宇美(うみ)断層
5.	警固(けご)断層帯
6.	日向峠ー小笠木峠(ひなたとうげ ーおかさぎとうげ)断層帯
7.	水縄(みのう)断層帯
8.	佐賀平野北縁断層帯
10.	雲仙断層群
	布田川(ふたがわ)断層帯・日奈久(ひ
11.	なぐ)断層帯
	緑川断層帯
	人吉盆地南縁断層
14.	出水(いずみ)断層帯
15.	節(こしき)断層帯
	市来(いちき)断層帯
28.	日出生(ひじう)断層帯
29.	万年山-崩平山(はねやま-くえのひら やま)断層帯
30.	中央構造線断層帯(豊予海峡-由布院) (ほうよかいきょうーゆふいん)
,	簡便な評価の対象とする活断層
17.	糸島半島沖断層群
18.	佐賀関断層
19.	多良岳南西麓断層帯
20.	福良木(ふくらぎ)断層
21.	阿蘇外輪南麓断層群
22.	鶴木場(つるきば)断層帯
23.	国見岳断層帯
24.	水俣断層帯
25.	鹿児島湾東縁断層帯
26.	鹿児島湾西縁断層帯
27.	池田湖西断層帯
9 別府一万	- 5年山(べっぷーはねやま)断層帯は、再

9. 別府一万年山(べっぷーはねやま)断層帯は、再評価に伴い、中央構造線断層帯、日出生断層帯、万年山一崩平山断層帯の3つの活断層帯として評価した。

(1)九州地域において詳細な評価をおこなった活断層

九州北部

	主要活	活断層のくくり	各区間が単独で活	複数区間が同時に	我が国の 主な活断原 における	喜	地震	発生確率	(注1)	地震後	平均活動間隔
	断層	(評価単位区間)	合の地震	活動する場 合の地震	相対的評価	(11.				経過率	最新活動時期
	帯		の規模(M)	の規模(M)	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内		取初 <i>心到听为</i>
		小倉東断層	7.1程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		7、启术的僧	1.11生/文		AJVJ		1,91	1,91	1,91	11.91	約4,600年前以後-2,400年前以前
	0	福智山断層帯	7.2程度	_	S*ランク		ほぼ0%~3%	ほぼ0%~4%	0.001%~8%	0.4~2 ト n 大	約9,400年-32,000年
			1.2性及		34727		121200 - 20	(3(30)) - 40	0.001% -0%	0.4 -2より人	約28,000年前以後-13,000年前以前
		西山断層帯(注5)	7.5程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
九 州		(大島沖区間)	1.0任文		N/V/		.1.01	-1-91	-1-01	. [1.0]	約20,000年前以後
北	0	西山断層帯(注5)	7.6程度	7.9~8.2	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
部		(西山区間)	1.0住汉	程度	N/V/		1.91	1.61	11.01	1.001	約13,000年前以後-概ね2,000年前以前
		西山断層帯(注5)	7.3程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		(嘉麻峠区間)	1.5/主/文		N/V/		1.91	.1.91	1.91	1.91	不明
	0	宇美断層	7.1程度	_	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2以下	約20000年-30000年
		丁夫例/信	7.11生/文		L/V/		1414070	1313070	14140/11	0.200	約4500年前以後
		警固断層带	7.0程度		Xランク		不明	不明	不明	ほぼ0	不明
	0	(北西部) ^(注6)	1.0住皮	7.7程度	X/V/		1,91	1,91	1,91	12120	2005年福岡県西方沖の地震
		警固断層带	7.2程度	1.1 生/文	S*ランク		0.3%~6%	0.4%~9%	0.9%~20%	0.6-1.4	約3,100年-5,500年
		(<i>南東部</i>)	1.4性及		3 本 ノン ク		0.5% ~0%	0.4/0 ~ 3/0	0.9/0 ~ 20/0	0.0 1.4	約4,300年前-3,400年前
	0	 日向峠-小笠木峠断層帯	7.2程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		日时听一小立个听时眉帘	1.4性及		Αノマク		71°97	<u>√1,471</u>	71,62	<u>√1,47</u> 1	不明

■ 九州中部

		九州中部									
	主要活断	活断層のくくり (評価単位区間)	各区間が単独で活動する場合	複数区間が同時に活動する場	主な活断原における相対的評価		地震	発生確率	(注1)	地震後経過率	平均活動間隔
	層 帯		合の地震 の規模(M)	合の地震 の規模(M)	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内	(社2)	最新活動時期
	0	水縄断層帯	7.2程度		Zランク).T.).T`O.W	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1	14,000年程度
		小純例唐冊	1.2 性皮		ムノンク		ほぼ0%	1515U%	(まは0%	0.1	679年筑紫地震
	0	佐賀平野北縁断層帯(注3)	7.5程度	_	Aランク		0.2%~0.5%	0.3%~0.8%	0.5%~2%	不明	6,600-19,000年程度
			1.0住及		A/V/		0.2/0 -0.5/0	0.3% -0.6%	0.5% - 2%	11.91	不明
	0	中央構造線断層帯 ^(注7)	7.8程度	_	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.3	約1,600年-1,700年
		(豊予海峡-由布院区間)	1.011/2				(3.(3.0.0)	10.10.0%	(31,310,70	0.2 0.0	17世紀
	0	日出生断層帯(注8)	7.5程度	_	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05-0.4	約20,000年-27,000年
											約7,300年前-6世紀
九 州	0	万年山一崩平山断層帯(注9)	7.3程度	_	Zランク		0.003%以下	0.007%以下	0.02%以下	0.4以下	2,100年-3,700年程度
中部											13世紀以後
部		雲仙断層群	7.3程度 以上	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		(北部) ^(注10) 雲仙断層群									約5,000年前以後
			7.1程度	_	Xランク	不明	不明	不明	不明		
	0	(南東部) ^(注10) 雲仙断層群									約2,500年前以後
		(南西部/ <i>北部</i>)	7.3程度		S*ランク		ほぼ0%~4%	ほぼ0%~7% ほ	ほぼ0%~10%	0.2-1.0	約2,400年前以後-11世紀以前
	-	雲仙断層群		7.5程度							約2,100年-6,500年
		(南西部/ <i>南部</i>) ^(注11)	7.1程度		Aランク		0.5%~1%	0.8%~2%	2%~5%	-	約4,500年前以後-16世紀以前
		布田川断層帯 ^(注12)	= 0.40 pts		(ऄ+19)		(>	(34)	(2)	(2)	8,100年-26,000年程度(注14)
		(布田川区間)	7.0程度	1.5 - 1.0	Zランク ^(注13)		ほぼ0% ^(注13)	ほぼ0% ^(注13)	ほぼ0% ^(注13)	ほぼO ^(注13)	平成28年(2016年)熊本地震 ^(注13)
		布田川断層帯(注12)	7.0年世	程度**1	ソニン・ク		7 111	7 111	7.111	7111	不明
	0	(宇土区間)	7.0程度	· 7.8~8.2	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
	ľ	布田川断層帯(注12)	7.2程度	程度 ^{※2}	Vランカ		不明	不明	不明	不明	不明
		(宇士半島北岸区間)	以上		Xランク		1197	/\^97	11.61	<u>√1,67</u>	不明

^{※1} 布田川断層帯全体が同時に活動した場合 ※2 日奈久断層帯全体と布田川断層帯全体布田川区間が同時に活動した場合

■ 九州南部

	主要活	活断層のくくり	各区間が 単独で活 動する場 合の地震 の規模(M)	合の地震	我が国の 主な活断原 における	喜	地震	発生確率	(注1)	地震後 経過率	平均活動間隔
	断 層	<i>(評価単位区間)</i>			相対的評価 (注				注2)	最新活動時期	
	帯				ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内		4249170 201-1791
		日奈久断層帯(注12)	6.8程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		(高野-白旗区間)	0.0住皮	7.7~8.0	A)V)		1,91	1,91	1,91	11.91	約1,600年以後-約1,200年前以前
		日奈久断層帯(注12)	7.5程度	程度 ^{※3}	S*ランク		ほぼ0%~6%	ほぼ0%~10%	ほぼ0%~20%	0.2-2.3	3,600年-11,000年程度
	0	(<i>日奈久区間</i>)	7.0住汉	7.8~8.2	34707		(4(4U) - U)	(5 (5 0% - 10%	(3(30) -20)	0.2 2.3	約8,400年前以後-約2,000年前以前
	$^{\sim}$	日奈久断層帯(注12)	7.3程度	程度※4	S*ランク		ほぼ0%~16%	ほぼ0%~30%	ほぼ0%~50%	0.1-1.5	1,100年-6,400年程度
		(八代海区間)	7.3年/文		34707		(4(40)) 10/0	13130% 30%	1212011 0011	0.1 1.5	約1,700年前以後-約900年前以前
	0	緑川断層帯 ^(注3)	7.4程度	_	Zランク		0.04%~0.09%	0.07%~0.1%	0.1%~0.3%	不明	約34,000年-68,000年程度
九	$\check{}$		1.1年/文		<i>L)</i> v <i>j</i>		0.01% 0.03%	0.01/0 0.1/0	0.170 0.070	.1.51	不明
州南	0	人吉盆地南縁断層	7.1程度	_	A*ランク		1%以下	2%以下	4%以下	0.9以下	約8,000年以上
部	Ĭ		111年/文		11.707		17000	2705/1	1/05/()	0.000	約7,300年前以後-3,200年前以前
	0	出水断層帯	7.0程度	_	A*ランク		ほぼ0%~1%	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~4%	0.3-0.9	概ね8,000年
	Ŭ		1.0住汉		11.11.707	. / 2 /	13130% 1%	131300 20	10010070 170	0.5 0.5	約7,300年前以後-2,400年前以前
		甑断層帯	6.9程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
	0	(上甑島北東沖区間)	0.3年/文		N/V/		1.51	1 91	1.51	1.91	不明
		甑断層帯	7.5程度	_	Aランク		0.3%~1%	0.5%~2%	0.9%~4%	不明	2,400年-11,000年程度
		(甑区間) ^(注3)	1.0任汉		11/0/		0.0% 1%	0.0% 2%	0.5% 1%	.1.51	不明
		市来断層帯	7.2程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		(市来区間)	1.2年/文		71/4/		1.51	1 91	1.51	1.51	不明
		市来断層帯	7.5程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
	Į	(甑海峡中央区間)	1.0/主/又		Xランク		1.91	1797	小明	1.91	不明
		市来断層帯	7.0程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		(吹上浜西方沖区間)	以上		11/4/		1.01	1.91	1.01	1.01	不明

- ※3 日奈久断層帯全体が同時に活動した場合
- ※4 日奈久断層帯全体と布田川断層帯全体布田川区間が同時に活動した場合
- 注1: 確率値は有効数字 1 桁で記述している。ただし、30年確率が10%台の場合は2桁で記述する。また「ほぼ 0 %」とあるのは、 10^{-3} %未満の確率値を表す。また、平均活動間隔が判明していない等の理由により、地震発生確率及び地震後経過率を求めることができないものは「不明」としている。
- 注2: 最新活動(地震発生)時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。値は0.1単位で記述し、0.1未満の場合は有効数字1桁で記述している。また「ほぼ0」とあるのは、10⁻³未満の値を表す。
- 注3: 最新活動の時期が特定できていないため、通常の活断層評価で用いている計算方法(地震の発生確率が時間とともに変動するモデル: BPT分布モデル)ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方(ポアソン過程)により長期確率を求めている。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注4: 活断層における今後30年以内の地震発生確率が3%以上を「Sランク」、 $0.1\sim3\%$ を「Aランク」、0.1%未満を「Zランク」、不明(すぐに地震が起きることが否定できない)を「Xランク」と表記している。地震後経過率(注2)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している。
- 注5: 西山断層帯については、これまで単一の活動区間として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2004)。その後、同断層帯延長部の分布及び活動履歴に関する新たな知見に基づき、大島沖区間・西山区間・嘉麻峠区間の3区間に区分して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2013b)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2004) : 「西山断層帯の評価」, 11p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2013b) : 「西山断層帯の評価 (一部改訂)」, 32p.

- 注6: 警固断層帯(北西部)は、平均活動間隔などが不明のため、地震発生確率は求めることができないが、最新活動時期が2005年であり、地震後経過年数が短いため、近い将来の地震発生確率はごく小さいと考えられる。なお、断層面の位置・形状や活動履歴の検討をするための地形学・地質学的な資料が得られていないことから、長期評価は主に地震観測結果などの地球物理学的な資料に基づいて行った。
- 注7: 中央構造線断層帯(豊予海峡-由布院区間)は、これまで別府-万年山断層帯の一部(主に別府湾-日出生断層帯/西部、大分平野-由布院断層帯)として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2005)。その後、新たな知見に基づき中央構造線断層帯の一区間として評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017a)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2005):「別府-万年山断層の評価」,73p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017a):「中央構造線断層帯の長期評価(第二版)」,162p.

注8: 日出生断層帯は、これまで別府-万年山断層帯の一部(主に別府湾-日出生断層帯/西部)として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2005)。その後、中央構造線断層帯の再評価(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017a)により、別府-万年山断層帯の構成断層を見直し、日出生断層帯として評価した(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017b)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2005):「別府-万年山断層の評価」,73p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017a):「中央構造線断層帯の長期評価(第二版)」,162p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017b):「日出生断層帯の長期評価(第一版)」,25p.

注9: 万年山-崩平山断層帯は、これまで別府-万年山断層帯の一部(主に野稲岳-万年山断層帯、崩平山-亀石山断層帯)として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2005)。その後、中央構造線断層帯の再評価(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017a)により、別府-万年山断層帯の構成断層を見直し、万年山-崩平山断層帯として評価した(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017c)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2005):「別府-万年山断層の評価」, 73p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017a):「中央構造線断層帯の長期評価(第二版)」,162p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017c):「万年山-崩平山断層帯の長期評価(第一版)」,28p.

- 注10: 雲仙断層群(北部、南東部)は、平均活動間隔が求められていないため、地震発生確率は不明となっている。 しかし、信頼度が低い情報ながら、これらの断層帯における平均変位速度は1m/千年程度に達する可能性が指摘されている。このため、これらの断層帯 においては平均活動間隔が最新活動時期からの経過時間よりも短い可能性もあり得るため、注意が必要である。
- 注11: 雲仙断層群(南西部/南部)は、最新活動時期が約4500年前-16世紀と求められているが、平均活動間隔2100-6500年に対して十分に絞り込まれていない。 このため、地震発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めてない。
- 注12: 布田川断層帯及び日奈久断層帯については、これまで布田川・日奈久断層帯として、北東部・中部・南部に3区分して評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会、2002)。地震調査研究推進本部地震調査委員会(2013a)は、その後に得られた新たな知見に基づき、布田川断層帯と日奈久断層帯に二分し、さらに布田川断層帯を布田川区間・宇土区間・宇土半島北岸区間、日奈久断層帯を高野一白旗区間・日奈久区間・八代海区間に区分して評価を行った。

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2002) : 「布田川・日奈久断層帯の評価」, 35p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2013a):「布田川断層帯・日奈久断層帯の評価(一部改訂)」, 66p.

注13: 布田川断層帯布田川区間については、平成28年(2016年)熊本地震で活動した(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2016ab)として評価を行った。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2016a):「平成28年4月16日熊本県熊本地方の地震の評価」(2016年4月16日公表)

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2016b):「平成28年(2016年)熊本地震の評価」(2016年5月13日公表)

注14: 布田川断層帯布田川区間の平均活動間隔については、暫定的に平成28年(2016年)熊本地震発生前の評価(地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2015)

における値とした。

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2015):「布田川断層帯・日奈久断層帯の評価 (一部改訂)」, 6p.

(2)九州地域において簡便な評価をおこなった活断層

地域区分	活断層	想定する 地震の規 模(M) ^(注15)	今後30年以内に M6.8以上の地震が 発生する確率(%)	平均活動間隔の推定 値(年) ^(注16)
九州北部	糸島半島沖断層群		0.3	15,000
九州	佐賀関断層		0.3	32,000
中部	多良岳南西麓断層帯		0.5	32,000
	福良木(ふくらぎ)断層	6.8		63,000
	阿蘇外輪南麓断層群			38,000
	鶴木場(つるきば)断層帯			63,000
	国見岳断層帯			63,000
九州 南部	水俣断層帯		4.2	32,000
	鹿児島湾東縁断層帯	6.9		5,800
	鹿児島湾西縁断層帯	6.8		63,000
	池田湖西断層帯	0.0		1,500

「詳細な評価の対象とする活断層」とは、地下を含めた断層の長さが15km 程度以上で、断層の位置・形状や活動履歴など活断層の特性を詳細に評価したものである。

「簡便な評価の対象とする活断層」は、地下を含めた断層の長さが10km 程度以上、15km 程度未満で、断層の分布のみを評価したものである。

注15: Mの値は、地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2009) でM6.8未満とされているものについても、ここでは鹿児島湾東縁断層帯をのぞき一律にM6.8の地震 が発生するとして評価し、各区域における地震発生確率評価において考慮している。

注16: 平均活動間隔は、1回のずれ量と平均変位速度から算出。

(3)九州地域の長期評価

	地域の長期評価 (M6.8以上、30年確率) (%) ^{注17、注18、注19)}							
地域区分	区域別の確率値	九州全域の確率値						
	95%信頼区間(中央値)(注20)							
九州北部	7-13 (9)							
九州中部	17-27 ^(注21) (21)	30-42 (35)						
九州南部	7-18 (8)							

注17: 個別の活断層の長期評価では、地表に断層活動の痕跡が確認できる「固有地震」(※)の発生確率のみを評価している。一方、マグニチュードが6.8 以上の地震でも明瞭な地表地震断層が出現しない場合や、出現しても長さやずれ量が活断層の長さなどから推定されるものに比べて有意に小さい場合があることを鑑み、本地域評価では、評価対象とした活断層において地表の証拠からは断層活動の痕跡を認めにくい地震の発生する確率も評価している(地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会、2010)(詳細は、本文(http://www.jishin.go.jp/main/chousa/13feb_chi_kyushu/k_honbun.pdf)注17 参照)

※「固有地震」とは、同時に活動すると想定される「活断層帯」や「評価単位区間(詳細は、本文

(http://www.jishin.go.jp/main/chousa/13feb_chi_kyushu/k_honbun.pdf) の「付録2-1 1回の地震に対応して活動する断層の長さの評価の考え方」参照)」の全体が活動する固有規模の地震のことである。Schwartz and Coppersmith (1984, 1986)が提唱したCharacteristic earthquake modelについて、垣見 (1989) が「個々の断層またはそのセグメントからは、基本的にほぼ同じ(最大もしくはそれに近い)規模の地震が繰り返し発生すること」と解釈しているものである。

注18: 「詳細な評価の対象とする活断層」とは、地下を含めた断層の長さが15 km 程度以上で、断層の位置・形状や活動履歴など活断層の特性を詳細に評価したものである。「簡便な評価の対象とする活断層」は、地下を含めた断層の長さが10 km 程度以上、15 km 程度未満で、断層の分布のみを評価したものである。各区域及び九州全域における今後30 年間以内に発生するM6.8 以上の地震発生確率には、「詳細な評価の対象とする活断層」に基づく確率だけでなく、「簡便な評価の対象とする活断層」に基づく確率も含まれている(詳細は本文

(http://www.jishin.go.jp/main/chousa/13feb_chi_kyushu/k_honbun.pdf) (説明)「3.九州地域の活断層で発生する地震の長期評価」を参照)。

注19: 九州地域の活断層の長期評価(第一版)(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2013)時点での活断層区分に基づき算出。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2013):「九州地域の活断層の活断層の長期評価(第一版)」,81p.

注20: 確率値は、本文(http://www.jishin.go.jp/main/chousa/13feb_chi_kyushu/k_honbun.pdf)「付録 4 - 3 評価地域の地震の発生確率の幅の統計的扱い」

に基づく。

注21: (注13) を反映して算出。

1-3. 四国地域の活断層の長期評価の概要(算定基準日 平成30年(2018年)1月1日)

四国地域の活断層の長期評価についての詳細は、活断層の地域評価のページ

(http://www.jishin.go.jp/evaluation/long_term_evaluation/regional_evaluation/shikoku-detail/) を参照ください。

<活断層の地域評価とは>

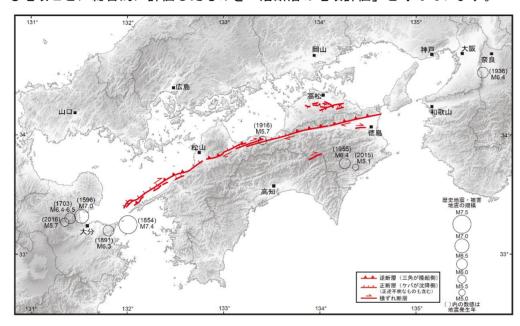
地震調査研究推進本部では、社会的・経済的に大きな影響を与えると考えられ、マグニチュード(M7)以上の地震を引き起こす可能性のある97の主要活断層帯(長さが20km以上の活断層帯)について、個別に長期評価を行ってきました。

しかし近年、M7未満の地震や主要活断層帯以外の地震によっても被害が生じていることから、ある地域の地震危険度を検討するためには、 個別の活断層を評価するだけでなく、その周囲の活断層も含めて総合的に評価する必要があることが明らかになってきました。

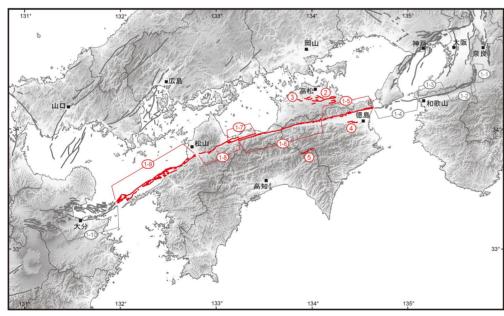
これを受けて、地震調査研究推進本部では、

- 対象地域に分布する活断層で発生する地震を総合的に評価する「地域評価」の導入
- ・ 評価対象とする活断層の見直し
- 地表の長さが短い活断層における、地質や地球物理学的情報を用いた地下の震源断層の位置・形状(長さなど)の評価等を含めた新たな評価手法をとりまとめました(活断層の長期評価手法(暫定版)、平成22年11月25日)。

こうした新たな評価手法に基づき、陸域及び沿岸海域に分布し、M 6.8以上の地震を引き起こす可能性のある活断層について、対象とする地域ごとに総合的に評価したものを「活断層の地域評価」と呼んでいます。



四国地域(評価対象地域)において詳細な評価の対象とする活断層、ずれの向き と種類及び歴史地震・被害地震の震央



四国地域(評価対象地域)において評価対象とした活断層の分布

左下図に対 応する番号	評価の対象とする活断層
1–5.	中央構造線断層帯 (讃岐山脈南縁東部区間) (さぬきさんみゃくなんえんとうぶ)
	中央構造線断層帯 (讃岐山脈南縁西部区間) (さぬきさんみゃくなんえんせいぶ)
1-7.	中央構造線断層帯(石鎚山脈北縁区間) (いしづちさんみゃくほくえん)
	中央構造線断層帯 (石鎚山脈北縁西部区間) (いしづちさんみゃくほくえんせいぶ)
1-9.	中央構造線断層帯 (伊予灘区間)(いよなだ)
2.	長尾断層帯(ながお)
3.	上法軍寺断層(かみほうぐんじ)
4.	<mark>上浦-西月ノ宮断層</mark> (かみうらーにしつきのみや)
5.	綱附森断層(つなつけもり)

※左図中の1-1~4、1-10は中央構造線断層帯の一部ではあるが、四国地域には含まれないため本項では記載しない。

(1)四国地域において評価をおこなった活断層

	主要活断	活断層のくくり <i>(評価単位区間)</i>	各区間が単独で活動する場	複数区間 が同時に 活動する 場合の地	における	我が国の 主な活断層 における 相対的評価 ^(注4)		地震発生確率(注1)			平均活動間隔
	層帯		合の地震 の規模(M)	震の規模 (M)	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
		中央構造線断層帯(注6)	7.7程度		Aランク		1%以下	2%以下	6%以下	0.6以下	900年-1,200年
		(讃岐山脈南縁東部区間)			Ayyy		1/05/	2/05/	0/02/	0.02	16世紀以後
		中央構造線断層帯 ^(注6)	8.0程度 もしくはそれ	8.0程度 もしくは	Aランク	13130%~0.4% 1313	ほぼ0%~0.8%	ほぼ0%~2%	0.2-0.5	約1,000年-1,500年	
		(讃岐山脈南縁西部区間)	以上		A)		13130% 0.1%	13130% 0.0%	18180% 2%	0.2 0.6	16世紀以後-17世紀以前
	0	中央構造線断層帯 ^(注6)	7.3程度		Zランク	0.01%以下	0.01%以下	0.03%以下	0.1%以下	0.4以下	約1,500年-1,800年
		(石鎚山脈北縁区間)	1.3作之	それ以上	2727		0.01/02	0.03/05/	0.1702	0.42	15世紀以後
四国		中央構造線断層帯 ^{往6)}	7.5程度		S*ランク		l∓l∓0%~12%	ほぼ0%~20%	/手/手0%~40%	0.2-0.9	約700年-1,300年
三		(石鎚山脈北縁西部区間)			34727		(A(AU/0 - 12/0	12120% - 20%	12120% - 40%	0.2 0.9	15世紀以後-18世紀以前
		中央構造線断層帯(注6)	8.0程度 もしくはそれ		Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.04-0.1	約2,900年-3,300年
		(伊予灘区間)	以上		ムノンソ		(4(40%)	1313070	14140%	0.04 0.1	17世紀以後-19世紀以前
	0	長尾断層帯(注7)	7.3程度		Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.01-0.04	概ね30,000年程度
)	大尾咧眉帘	7.3住及		ムノング		(A(AU/0	(3(30%	1414U%	0.01-0.04	8世紀以後-16世紀以前
		上法軍寺断層	6.0程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		上伝車寸別層	(注5)		AJZJ		71.60	71.67	11.60	11.67	不明
		上浦ー西月ノ宮断層	6.5程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		工佣一四月/百四厝	(注5)		A) > 9	<i>'</i> ク	不明	个明	个明	个明	不明
		—————————————————————————————————————	6.7程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		孙州书门 <i>本</i> 术约17官	(注5)		A)V)		71.67	71.67		71.67	不明

- 注1: 確率値は有効数字 1 桁で記述している。ただし、30年確率が10%台の場合は2桁で記述する。また「ほぼ0%」とあるのは、 10^{-3} %未満の確率値を表す。また、平均活動間隔が判明していない等の理由により、地震発生確率及び地震後経過率を求めることができないものは「不明」としている。
- 注2: 最新活動(地震発生)時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。値は0.1単位で記述し、0.1未満の場合は有効数字1桁で記述している。また「ほぼ0」とあるのは、10⁻³未満の値を表す。
- 注3: 最新活動の時期が特定できていないため、通常の活断層評価で用いている計算方法(地震の発生確率が時間とともに変動するモデル: BPT分布モデル)ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方(ポアソン過程)により長期確率を求めている。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注4: 活断層における今後30年以内の地震発生確率が3%以上を「Sランク」、0.1~3%を「Aランク」、0.1%未満を「Zランク」、不明(すぐに地震が起きることが否定できない)を「Xランク」と表記している。地震後経過率(注2)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している。
- 注5: 断層の長さに基づいて地震の規模を評価した結果がM6.8未満となる場合、ここでは地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会(2010)に従い、地震の規模の下限M6.8を用いて評価している。地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会(2010)は、長さが20km に満たない単位区間が単独で活動する場合に、その長さに基づき松田(1975)の経験式を用いて地震の規模を評価した場合は地震の規模を過小評価している可能性があるとして、地表に変位が現れている活断層については、最低限考慮すべき地震の規模としてM6.8を設定するとしている。
- 注6: 中央構造線断層帯については、これまで6つの区間に分かれて活動するとして評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2011)。その後、同断層帯及び延長部の分布に関する新たな知見に基づき、これまでの各区間を9つの区間に再整理し、また、西端を九州側へ延長した豊予海峡ー由布院区間を追加して、計10の区間の断層帯として評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017a)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2011):「中央構造線断層帯の評価(一部改訂)」,88p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017a):「中央構造線断層帯の長期評価(第二版)」,162p.

注7: 長尾断層帯については、これまで長尾断層 、大川撓曲、鮎滝断層に区分していた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2005)。その後、同断層帯延長部の分布に関する新たな知見に基づき、長尾断層帯の西端を西へ延長した部分を追加して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2017b)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2005):「長尾断層帯の長期評価」, 16p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2017b):「長尾断層帯の長期評価(一部改訂)」, 21p.

(2)四国地域の長期評価

地域	地域の長期評価 (M6.8以上、30年確率) (%) ^{注8、注9、注10)}
四国地域	9-15 (10)

主8: 個別の活断層の長期評価では、地表に断層活動の痕跡が確認できる「固有地震」(※)の発生確率のみを評価している。一方、マグニチュードが6.8 以上の地震でも明瞭な地表地震断層が出現しない場合や、出現しても長さやずれの量が推定されるものに比べて有意に小さい場合があることを鑑み、本地域評価では、評価対象とした活断層において地表の証拠からは断層活動の痕跡を認めにくい地震の発生する確率も評価している(地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会,2010)。詳細は本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/17dec_chi_shikoku/shikoku_honbun.pdf]の注14参照。

※ 「固有地震」とは、同時に活動すると想定される「活断層帯」や「評価単位区間(詳細は、本文 [http://www.jishin.go.jp/main/chousa/17dec_chi_shikoku/shikoku_honbun.pdf]の「付録2 1回の地震に対応して活動する断層の長さの評価の考え方」を参照)」の全体が活動する固有規模の地震のことである。Schwartz and Coppersmith(1984, 1986)が提唱したCharacteristic earthquake modelについて、垣見(1989)が「個々の断層またはそのセグメントからは、基本的にほぼ同じ(最大もしくはそれに近い)規模の地震が繰り返し発生すること」と解釈しているものである。

注9: 評価対象地域全域における今後30年間以内に発生するマグニチュード6.8以上の地震発生確率には、主要活断層帯及び主要活断層帯以外の活断層に基づく確率が含まれている。詳細は本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/17dec_chi_shikoku/shikoku_honbun.pdf]の説明文1-(2)「評価区分」を参照。

注10: 確率値(95%信頼区間。括弧内は中央値)は、本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/17dec_chi_shikoku/shikoku_honbun.pdf]の「付録4-2 評価 地域の地震の発生確率の算出」に基づく。

1-4. 中国地域の活断層の長期評価の概要(算定基準日 平成30年(2018年)1月1日)

中国地域の活断層の長期評価についての詳細は、活断層の地域評価のページ

(http://www.jishin.go.jp/evaluation/long_term_evaluation/regional_evaluation/chugoku-detail) を参照ください。

<活断層の地域評価とは>

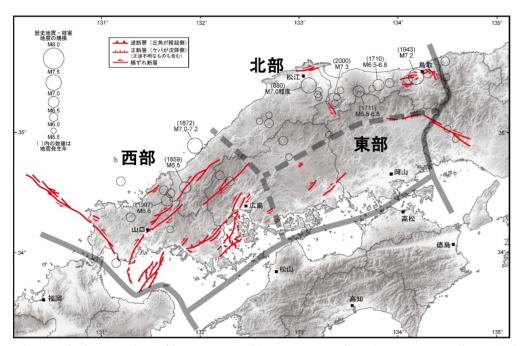
地震調査研究推進本部では、社会的・経済的に大きな影響を与えると考えられ、マグニチュード(M7)以上の地震を引き起こす可能性のある97の主要活断層帯(長さが20km以上の活断層帯)について、個別に長期評価を行ってきました。

しかし近年、M7未満の地震や主要活断層帯以外の地震によっても被害が生じていることから、ある地域の地震危険度を検討するためには、 個別の活断層を評価するだけでなく、その周囲の活断層も含めて総合的に評価する必要があることが明らかになってきました。

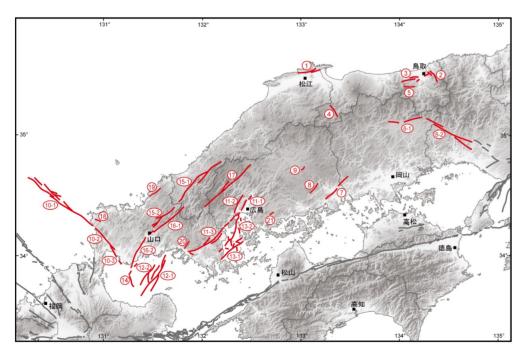
これを受けて、地震調査研究推進本部では、

- 対象地域に分布する活断層で発生する地震を総合的に評価する「地域評価」の導入
- ・ 評価対象とする活断層の見直し
- ・ 地表の長さが短い活断層における、地質や地球物理学的情報を用いた地下の震源断層の位置・形状(長さなど)の評価等を含めた新たな評価手法をとりまとめました(活断層の長期評価手法(暫定版)、平成22年11月25日)。

こうした新たな評価手法に基づき、陸域及び沿岸海域に分布し、M6.8以上の地震を引き起こす可能性のある活断層について、対象とする地域ごとに総合的に評価したものを「活断層の地域評価」と呼んでいます。



中国地域(評価対象地域)において詳細な評価の対象とする活断層、ずれの向き と種類及び歴史地震・被害地震の震央



中国地域(評価対象地域)において評価対象とした活断層の分布

左下図に対 応する番号	評価の対象とする活断層
1.	宍道(鹿島)断層(しんじ(かしま))
2.	雨滝一釜戸断層(あめだきーかまと)
3.	鹿野-吉岡断層(しかの-よしおか)
4.	日南湖断層(にちなんこ)
5.	岩坪断層(いわつぼ)
6-1.	那岐山断層帯(なぎせん)
6-2.	山崎断層帯(主部北西部区間) (やまさき)
7.	<u>長者ヶ原ー芳井断層</u> (ちょうじゃがはらーよしい)
8.	宇津戸断層(うづと)
9.	安田斯屋 (やすだ)
10-1.	菊川断層帯(北部区間) (きくがわ) 菊川断層帯(中部区間)
10-2.	菊川断層帯(中部区間)
10-3.	菊川断層帯(南部区間)
11-1.	岩国-五日市断層帯(己斐断層区間) (いわくに-いつかいち) (こい)
11-2.	岩国-五日市断層帯(五日市断層区間)
11-3.	岩国-五日市断層帯(岩国断層区間)
12-1.	周防灘断層帯(周防灘断層帯主部区間) (すおうなだ)
12-2.	周防灘断層帯(秋穂沖断層区間) (すおうなだ)(あいおおき)
13-1.	安芸灘断層帯(あきなだ)
13-2.	<mark>広島湾ー岩国沖断層帯</mark> (ひろしまわんーいわくにおき)
14.	宇部南方沖断層(うべなんぽうおき)
15-1.	弥栄断層(やさか)
15-2.	地福断層(じふく)
16-1.	大原湖断層(おおはらこ)
16–2.	<u>小郡断層</u> (おごおり)
17.	筒賀断層(つつが)
18.	滝部断層(たきべ)
19.	奈古断層(なご)
20.	宋谷断僧(さかえたに)
21.	黒瀬断層(くろせ)

(1)中国地域において評価をおこなった活断層

■ (区域1)北部

	主要活	活断層のくくり <i>(評価単位区間)</i>	各区間が 単独でる場 合の地震 の規模(M)	複数区間 が同時に 活動する	我が国の 主な活断層 における 相対的評価 ^(注4)		地震	地震発生確率(注1)			平均活動間隔	
	石 断 層			場合の地震の規模・ (M)						経過率 (注2)	最新活動時期	
	帯				ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内		以外[7日 封J F] 为]	
	0	宍道(鹿島)断層	7.0程度 もしくはそれ 以上	_	ケース1: Zランク		ケース1:ほぼ 0%~0.003%	ケース1:ほぼ 0%~0.005%		ケース1: 0.1-0.4	約3,300年-4,900年	
北部					ケース2: S * ランク		ケース2: 0.9%-6%	ケース2: 2%-10%		ケース2: 0.8-1.8	ケース1:8世紀以後、14世紀以前 ケース2:約5,900年前以後-約3,700年前以前	
部		雨滝-釜戸断層	6.7程度	_	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.2-0.4	20,000年程度	
					ムノマソ		1212011	(51)51575	12120/1	0.2 0.4	約7,600年前以後-約3,700年前以前	
	0	鹿野一吉岡断層	7.2程度		Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.008 -0.02	4,600年-9,200年程度	
		此判 口间的信			ムノング		1212011	1313070	12120/0		1943年鳥取地震	
		日南湖断層	6.7程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明	
		口用你的心	(注5)		AJZJ		√1.49J	11.60	1,61	11.60	約90,000年前以後-約28,000年前以前	
		岩坪断層	6.5程度	_	Vランカ		不明	不明	不明	不明	不明	
		石坪別厝	(注5)		Xランク					不明	不明	

■ (区域2)東部

_											
	主要活断	活断層のくくり <i>(評価単位区間)</i>	各区間が 単独で活 動する場	複数区間 が同時に 活動する 場合の地	我が国の 主な活断層 における 相対的評価 ^(注4)		地震発生確率(注1)			地震後経過率	平均活動間隔
	層帯		合の地震 の規模(M)	震の規模 (M)	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
		山崎断層帯	7 OTH ##		4.50		0.000 0.10			7.11	24,000年-53,000年程度
		(那岐山断層帯) ^(注3)	7.3程度		Aランク		0.06%~0.1%	0.1%~0.2%	0.2%~0.4%	不明	不明
東部	0	山崎断層帯	7 740 00	_	Aランク		0.00% 10	0.00 00	0.40/40/	0.5.0.0	約1,800年-2,300年
部		(主部北西部区間)	7.7程度		Aフンク		0.09%~1%	0.2%~2%	0.4%~4%	0.5-0.6	868年播磨国地震
		長者ヶ原-芳井断層	7.3程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不 明	不明
	0	交有ケ原一万井町層	1.3 住皮				11.67	个明	个明	不明	不明
		宇津戸断層	6.7程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		十 年广例僧	(注5)		A)V)		11.67	17.99	/\Pj	个明	不明
		安田断層	6.0程度		Vランカ		不明不明	7.10	不明	不明	不明
		女 四	(注5)		Xランク			71.97		不明	不明

■ (区域3)西部

	主要活断	活断層のくくり (評価単位区間)	各区間が 単独で活 動する場 合の地震	複数区間 が同時に 活動する 場合の地	我が国の 主な活断原 における 相対的評価 ⁽	喜		桑 全確率	注 (注1)	地震後経過率	平均活動間隔
	層帯		の規模(M)	震の規模 (M)	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期
		菊川断層帯 ^(注6)	7.7程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		(北部区間)	1.17年/文	7.8-8.2	A) >)		.1.93	-1.01	-1-91	1.01	約14,000年前以後
	0	菊川断層帯 ^(注6)	7.6程度	程度もし	S*ランク		0.1%~4%	0.2%~7%	0.4%~10%	0.6-1.4	約4,100年-約5,900年
		(中部区間)		くはそれ 以上							約5,900年前以後-約3,300年前以前
		菊川断層帯(注6)	6.9程度 もしくはそれ		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		(南部区間)	以上								不明
		岩国一五日市断層帯(注7)	7.1程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		(己斐断層区間)								約23,000年前以前	
	0	岩国-五日市断層帯 ^(注7) (<i>五日市断層区間</i>)	7.2程度	7.9-8.0 程度	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		出口 <i>口间间间区间)</i> 岩国一五日市断層帯 ^(注7)		1年/文							約9,000年-18,000年
		石国一五日川例唐帝 (<i>岩国断層区間</i>)	7.6程度		A*ランク		0.03%~2%	0.05%~3%	0.1%~6%	0.6-1.2	約10,000年 13,000年 約10,000年前
		周防灘断層帯 ^(注8)									概ね5,800年-7,500年
		(周防灘断層帯主部区間)	7.6程度		S*ランク		2%~4%	4%~6%	7%~10%	1.3-1.9	約11,000年前以後-10,000年前以前
	0	周防灘断層帯 ^(注8)		_							不明
		(秋穂沖断層区間)	7.1程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
	0	☆ # # # NF 〒 ## (注9)	7.2程度		S*ランク		0.1%~10%	0.2%~20%	0.4%~30%	0.6-2.4	2,300年-6,400年程度
西部		安芸灘断層帯(注9)	7.2住及		3本 ノンク		0.1%~10%	0.2%~20%	0.4%~30%	0.6-2.4	約5,600年前以後一約3,600年前以前
司	0	広島湾-岩国沖断層帯 ^(注9)	7.5程度	1	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		公面得 石巴汀門信用	1.0位之		Ayvy		1 93	1 23	1 93	1 93	不明
		宇部南方沖断層	6.8程度	_	Xランク		不明不明	不明	不明	不明	不明
		1 55114224 1 15776									不明
	0	弥栄断層	7.7程度	_	S*ランク		ほぼ0%~6%	ほぼ0%~10%	ほぼ0%~20%	0.02-2より 大	約4,000年-13,000年
										人	約11,000年前以後-約300年前以前
	0	地福断層	7.2程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明 不明
	0	大原湖断層	7.5程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
	_										約23,000年-25,000年
	0	小郡断層	7.3程度	_	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.01-0.02	約500年前以後一約300年前以前
	$\overline{}$	於力DNC 豆	7.048 ===		VEVA		7.00	→ np	7 nr	7 np	不明
	0	筒賀断層	7.8程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		 滝部断層	6.1程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		1色中四/百	(注5)		Alvi		(1-91	-1-91	- 1.93	1.91	不明
		奈古断層	6.7程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	(注5)						小 明	- 小明	不明
		栄谷断層	6.3程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
			(注5)								不明
		黒瀬断層	6.0程度	_	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		注5)			,.				1.94		不明

- $\dot{\Xi}^{1}$: 確率値は有効数字 1 桁で記述している。ただし、30年確率が10%台の場合は2桁で記述する。また「ほぼ 0%」とあるのは、 10^{-3} %未満の確率値を表す。また、平均活動間隔が判明していない等の理由により、地震発生確率及び地震後経過率を求めることができないものは「不明」としている。
- 注2: 最新活動(地震発生)時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。値は0.1単位で記述し、0.1未満の場合は有効数字1桁で記述している。また「ほぼ0」とあるのは、10⁻³未満の値を表す。
- 注3: 最新活動の時期が特定できていないため、通常の活断層評価で用いている計算方法(地震の発生確率が時間とともに変動するモデル:BPT分布モデル)ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方(ポアソン過程)により長期確率を求めている。同じ理由から、地震後経過率も求められない。
- 注4: 活断層における今後30年以内の地震発生確率が3%以上を「Sランク」、0.1~3%を「Aランク」、0.1%未満を「Zランク」、不明(すぐに地震が起きることが否定できない)を「Xランク」と表記している。地震後経過率(注2)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している。
- 注5: 断層の長さに基づいて地震の規模を評価した結果がM6.8未満となる場合、ここでは地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会(2010)に従い、地震の規模の下限M6.8を用いて評価している。地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会(2010)は、長さが20km に満たない単位区間が単独で活動する場合に、その長さに基づき松田(1975)の経験式を用いて地震の規模を評価した場合は地震の規模を過小評価している可能性があるとして、地表に変位が現れている活断層については、最低限考慮すべき地震の規模としてM6.8を設定するとしている。
- 注6: 菊川断層帯については、これまで中部区間を単一の活動区間として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2003)。その後、同断層帯延長部の分布に関する新たな知見に基づき、菊川断層帯の北西端を北西の沖合へ延長した北部区間を追加し、また、菊川断層帯の南東端を南東へ延長した南部区間を追加して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2016)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2003):「菊川断層帯の評価」, 10p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2016):「菊川断層帯の長期評価(一部改訂)」,28p.

注7: 岩国-五日市断層帯については、これまで岩国断層帯、五日市断層帯のそれぞれを別の断層帯として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2004a,2004b)。その後、岩国断層帯、五日市断層帯のそれぞれの延長部の分布に関する新たな知見に基づき、五日市断層帯についてはその南端を海域へ延長して五日市断層区間とし、また、岩国断層帯についてはその北端を海域へ延長して岩国断層区間とし、さらに、己斐断層区間を追加して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2016)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2004a):「五日市断層帯の評価」, 16p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2004b):「岩国断層帯の評価」, 15p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2016) : 「岩国-五日市断層帯 (岩国断層帯・五日市断層帯) の長期評価 (一部改訂)」, 29p.

注8: 周防灘断層帯については、これまで宇部沖断層群として周防灘断層群主部、秋穂沖断層帯、宇部南方沖断層帯に区分して評価していた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2008)。その後、これまで断層群としていたものを陸域の新たな知見や連続性などから整理し、周防灘断層帯主部区間、秋穂沖断層区間の2つに区分して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2016)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2008):「宇部沖断層群(周防灘断層群)の評価」, 29p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2016):「周防灘断層帯(周防灘断層群・宇部沖断層群)の長期評価(一部改訂)」,28p.

注9: 安芸灘断層帯、広島湾ー岩国沖断層帯については、これまで安芸灘断層群として評価していた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2009)。その後、これまで断層群としていたものを新たな知見により、断層の位置関係や連続性を再整理し、安芸灘断層帯、広島湾ー岩国沖断層帯の2つの断層帯に区分して評価を行った(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2016)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2009) : 「安芸灘断層群の評価」, 22p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2016) : 「安芸灘断層帯・広島湾ー岩国沖断層帯 (安芸灘断層群) の長期評価 (一部改訂)」, 28p.

(2)中国地域の長期評価

地域区分	地域の長期評価 (M6.8以上、30年確率)(%)							
	区域別の	中国全域の確率値						
北部	40	(注10)						
東部	2-3 (2)	(注11、注12、注13)	50	(注10)				
西部	14-20 (1 7)	(注11、注12、注13)						

注10: 各区域及び評価対象地域全域における最近の地震活動から統計的経験則(地震の規模と規模別度数の経験式)により求めた今後30年間以内に発生するマグニチュード6.8以上の地震発生確率。詳細は本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/16jul_chi_chugoku/chu_honbun.pdf]の表10、及び「付録4の4-3.活断層を特定しない地震の確率評価」を参照。

注11: 個別の活断層の長期評価では、地表に断層活動の痕跡が確認できる「固有地震」(※)の発生確率のみを評価している。一方、マグニチュードが6.8 以上の地震でも明瞭な地表地震断層が出現しない場合や、出現しても長さやずれの量が推定されるものに比べて有意に小さい場合があることを鑑み、本地域評価では、評価対象とした活断層において地表の証拠からは断層活動の痕跡を認めにくい地震の発生する確率も評価している(地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会、2010)。詳細は本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/16jul_chi_chugoku/chu_honbun.pdf]の注14参照。

※ 「固有地震」とは、同時に活動すると想定される「活断層帯」や「評価単位区間(詳細は、本文 [http://www.jishin.go.jp/main/chousa/16jul_chi_chugoku/chu_honbun.pdf]の「付録2 1回の地震に対応して活動する断層の長さの評価の考え 方」を参照)」の全体が活動する固有規模の地震のことである。Schwartz and Coppersmith (1984, 1986)が提唱したCharacteristic earthquake modelについて、垣見 (1989) が「個々の断層またはそのセグメントからは、基本的にほぼ同じ(最大もしくはそれに近い)規模の地震が繰り返し発生すること」と解釈しているものである。

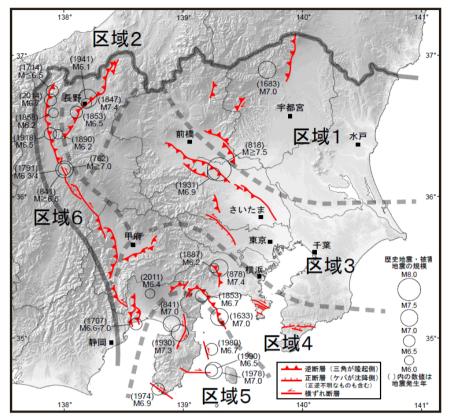
注12: 各区域及び評価対象地域全域における今後30年間以内に発生するマグニチュード6.8以上の地震発生確率には、主要活断層帯及び主要活断層帯以外の活断層に基づく確率が含まれている。詳細は本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/16jul_chi_chugoku/chu_honbun.pdf]の説明文1-(2)「評価区分」を参照。

注13: 確率値(95%信頼区間。括弧内は中央値)は、本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/16jul_chi_chugoku/chu_honbun.pdf]の「付録4-2 評価地域の地震の発生確率の算出」に基づく。

1-4. 関東地域の活断層の長期評価の概要(算定基準日 平成30年(2018年)1月1日)

関東地域の活断層の長期評価についての詳細は、活断層の地域評価のページ

(http://www.jishin.go.jp/evaluation/long_term_evaluation/regional_evaluation/kanto-detail) を参照ください。



関東地域(評価対象地域全体)において詳細な評価の対象とする活断層の ずれの向きと種類及び関東地域で発生した歴史地震・被害地震の震央

<活断層の地域評価とは>

地震調査研究推進本部では、社会的・経済的に大きな影響を与えると考えられ、マグニチュード(M7)以上の地震を引き起こす可能性のある97の主要活断層帯(長さが20km以上の活断層帯)について、個別に長期評価を行ってきました。

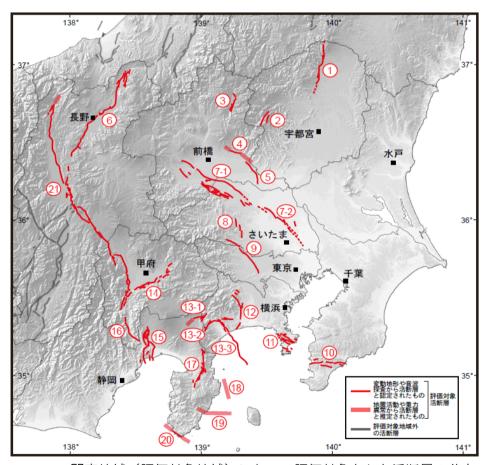
しかし近年、M7未満の地震や主要活断層帯以外の地震によっても被害が生じていることから、ある地域の地震危険度を検討するためには、個別の活断層を評価するだけでなく、その周囲の活断層も含めて総合的に評価する必要があることが明らかになってきました。

これを受けて、地震調査研究推進本部では、

- 対象地域に分布する活断層で発生する地震を総合的に評価する「地域評価」の導入
- ・ 評価対象とする活断層の見直し
- ・ 地表の長さが短い活断層における、地質や地球物理学的 情報を用いた地下の震源断層の位置・形状(長さなど) の評価

等を含めた新たな評価手法をとりまとめました(活断層の 長期評価手法(暫定版)、平成22年11月25日)。

こうした新たな評価手法に基づき、陸域及び沿岸海域に分布 し、M6.8以上の地震を引き起こす可能性のある活断層につ いて、対象とする地域ごとに総合的に評価したものを「活断層 の地域評価」と呼んでいます。



関東地域(評価対象地域)において評価対象とした活断層の分布

	詳細な評価の対象とする活断層
1.	
2.	内ノ籠(うちのこもり)断層
3.	片品川左岸(かたしながわさがん)断層
4.	大久保(おおくぼ)断層
5.	太田(おおた)断層
6.	長野盆地西縁(ながのぼんちせいえん) 断層帯
7–1.	深谷(ふかや)断層帯
7-2.	&
8.	越生(おごせ)断層
9.	立川(たちかわ)断層帯
10.	鴨川低地(かもがわていち)断層帯
11.	三浦半島(みうらはんとう)断層群
	伊勢原(いせはら)断層
13-1.	塩沢(しおざわ)断層帯
13-2.	平山(ひらやま)-松田北(まつだき た)断層帯
13-3.	国府津(こうづ)一松田(まつだ)断層 帯
14.	曽根丘陵(そねきゅうりょう)断層帯
15.	富士川河口(ふじかわかこう)断層帯
16.	身延(みのぶ)断層
17.	北伊豆(きたいず)断層帯
18.	伊東沖(いとうおき)断層
19.	稲取(いなとり)断層帯
20.	
21.	糸魚川(いといがわ) 一静岡(しずおか) 構造線断層帯

(1)関東地域において詳細な評価をおこなった活断層

(区域1) 東北日本弧南方延長

	主要活断	活断層のくくり <i>(評価単位区間)</i>	各区間が 単独で活 動する場 合の地震	複数区間 が同時に 活動する場 合の地震	主な活断層 における	我が国の 主な活断層 における 相対的評価 ^(注4)		注(注1)	地震後経過率	平均活動間隔			
東	層帯				ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期		
北	0	関谷断層	7.5程度	_	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.08-0.3	約2,600年-4,100年		
日本)		7.3 住及		ムノンク		(J(J)	(A(AU%	(J(JU70	0.06-0.3	14世紀以後-17世紀以前		
本弧南方		内ノ籠断層	6.6程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明		
南方		ドリノ 作色四川音	(注5)		AJVJ		11.91	21.03	11.01	2 [199]	不明		
延長		片品川左岸断層 ^(注3)	6.7程度		Aランク		0.4%-0.6%	0.6%-1%	1%-2%	不明	約5,200年-8,100年もしくはそれ以下		
長		月	(注5)		AJZJ		以上	以上	以上	1,61	不明		
	0	十九四年屋(注3)	7.0程度		Λランク		0.6%	1%	2%	不明	5,000年程度		
)	人人体則層	大久保断層 ^(注3)	0.0%	170	2/0	1,61	不明					
		太田断層	6.9程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明		
		<u> </u>	0.3作之		$\Lambda/\sqrt{2}$		1193			个明	約16,000年前以後-西暦1108年以前		

(区域2)信越褶曲帯

信	主要活断	活断層のくくり <i>(評価単位区間)</i>	各区間が 単独でる場 動の地震	複数区間 が同時に 活動する場 合の地震	我が国の 主な活断層 における 相対的評価 ⁽		地震発生確率(注1)			地震後経過率	平均活動間隔		
信越褶曲	断層帯			の規模(M)	ランク	佨	30年以内	50年以内	100年以内		最新活動時期		
曲帯		長野盆地西縁断層帯 ^(注6) (飯山-千曲区間)	7.4~7.8 程度	7.9程度 -	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.07-0.2	800年-2,500年程度 1847年善光寺地震		
		長野盆地西縁断層帯 ^(注6) (麻績区間)	6.8程度	7.9住及	Xランク		不明	不明	不明	不明	不明不明		

(区域3)関東山地-関東平野

		(四次 0 / 因不田地 因不干到									
	主要活断	活断層のくくり <i>(評価単位区間)</i>	各区間が 単独で活 動する場 合の地震	複数区間 が同時に 活動する場 合の地震	における	主な活断層・地震発生な変(注)		地震後経過率	平均活動間隔		
関	層帯			の規模(M)		色	30年以内	50年以内	100年以内	,,	最新活動時期
東		深谷断層帯(注7)	7.9程度		Aランク		ほぼ0%~0.1%	17170V~.0 2V) #) # OV ~ . O 5 W	0.2-0.6	10,000年-25,000年程度
山地		休台即唐帝	,	. W1			(4(40%° ~0.1%	1414Um ~0.2m	(4(40m ~0.5m	0.2-0.6	約6,200年前以後-約5,800年前以前
	0	綾瀬川断層(注7)	7.0程度	7.5程度**1	・ Zランク 8.0程度 ^{**2}		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.1-0.3	45,000年-71,000年程度
関		(鴻巣-伊奈区間)					12120/	(4(40)	1212070	0.1-0.3	約15,000年前以後-約9,000年前以前
関東平		綾瀬川断層(注7)	7.0程度	0.0/主/文			不明	不明	不明	不明	不明
野		(伊奈一川口区間)	7.0怪及		Xランク		1197	1197	/\PJ	7197	不明
		越生断層	6.7程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		医生 例 層	(注5)		A)V)		71.60	71,61	71.93	71.93	不明
		立川断層帯	7.4程度		A*ランク		0.5%~2%	0.8%~4%	2%~7%	0.9-2.0	10,000年-15,000年程度
	0	立川剛 僧 帘	1.4任及						2%~7%	0.9 2.0	約20,000年前以後-13,000年前以前

^{※1} 綾瀬川断層全体が同時に活動した場合 ※2 深谷断層帯と綾瀬川断層全体が同時に活動した場合

■ (区域4)伊豆-小笠原弧の衝突プレート沈み込み帯

	主要活断	活断層のくくり <i>(評価単位区間)</i>	各区間が 単独で活 動する場	複数区間が同時に活動する場	我が国の 主な活断層 における 相対的評価 ⁽	4	地震	凳 生確率	(注1)	地震後 経過率	平均活動間隔
	層帯	(1) IM + 1= 10)	合の地震 の規模(M)		ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
	0	鴨川低地断層帯	概ね7.2		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
伊					Ayyy		1-91	1.91	1.51	1.51	不明
早		三浦半島断層群	6.7程度 もしくはそれ	_	S*ランク		ほぼ0%~3%	ほぼ0%~5%	ほぼ0%~10%	0.3-0.8	1,900年-4,900年程度
		(主部/ <i>衣笠·北武断層帯</i>)	以上(注5)		54707		1313070 070	1313070 070	10/10/07/07/10/07	0.0 0.0	6-7世紀
笠	0	三浦半島断層群	6.6程度 もしくはそれ	_	S*ランク		6%~11%	9%~20%	20%~30%	1.0-1.4	1,600年-1,900年程度
原		(主部/武山断層帯)	以上(注5)		34727		0% -11%	5/0 - 20/0	20% - 30%	1.0 1.4	約2,300年前以後-約1,900年前以前
小笠原弧衝突プ		三浦半島断層群	6.1程度 もしくはそれ		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
突っ		(南部)	以上 ^(注5)		AJVJ		71.601	1101	71.03	1,61	約26,000年前以後-約22,000年前以前
با	0	伊勢原断層	7.0程度		Zランク		ほぼ0%~	ほぼ0%~	ほぼ0%~	0.05-0.4	4,000年-6,000年程度
			7.0任/文				0.003%	0.005%	0.01%	0.00 0.4	5世紀以後-18世紀初頭以前
		塩沢断層帯(注3)(注8)	6.8程度	_	Sランク		4%以下	6%以下	10%以下	不明	800年程度以上
沈み込み帯			以上		5/4/		1/00/	0/02/	10/02/	. [1.19]	不明
込み	0	平山一松田北断層帯(注8)	6.8程度	_	A*ランク		0.09%~0.6%	0.2%~1%	0.3%~2%	0.5-0.7	4,000年-5,000年程度
帯			0.0/王/文		1111/00/			0.270	0.000	0.0 0	約2,700年前
		国府津一松田断層帯(注8)	_	-	_	_	-	-	_	_	(分岐断層)
	0	曽根丘陵断層帯 ^(注9)	7.3程度		Aランク		1%	2%	3%~5%	-	概ね2,000年-3,000年
		官似工修町層帘	1.3作之		AJVJ		1 /0	2 /0	3/0 - 3/0		約10,000年前以後
	0	身延断層	7.0程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		为 延 的 / 官	1.0住皮		AJVJ		71'93	71793	71793	不明	不明

(参考)富士川河口断層帯の長期評価の概要(注10)

(駿河トラフで発生した海溝型地震に伴って活動したと考える場合の地震発生確率等)

活断層のくくり	長期評価で 予想 した	我が国の 主な活断原 における	喜	地震	毫発生確率	(注1)	地震後 経過率	平均活動間隔	
<i>(評価単位区間)</i>	│ 地震規模 │(マグニチュード) │	相対的評価 ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内	(注2)	人 最新活動時期	
富士川河口断層帯 (ケースa)	8.0程度	S*ランク		10%~18%	20%~30%	30%~50%	0.9-2より大	約150年-300年 13世紀後半以後-18世紀前半以前	
富士川河口断層帯 (ケースb)	8.0程度	S*ランク		2%~11%もしく はそれ以下	3%~20%もしく はそれ以下	8%~30%もしく はそれ以下	0.7-1.2もし くはそれ以 下	約1,300年-1,600年 6世紀以後-9世紀以前、もしくはそれ以後	

■ (区域5)伊豆一小笠原弧

	主要活断	活断層のくくり (評価単位区間)		複数区間 が同時に 活動する場	我が国の 主な活断履 における 相対的評価 ⁽	昌		発生確率	(注1)	地震後 経過率	平均活動間隔
	層帯	(日) 脚牛 (工厂)	合の地震 の規模(M)	合の地震 の規模(M)				50年以中	100年以中	(注2)	最新活動時期
伊	帯		47796 [20 (1117	0579E X (1117	ランク	色	30年以内	50年以内	100年以内		
豆	0	北伊豆断層帯	7.3程度	_	Zランク		ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.06	約1,400年-1,500年
小			1.3住及		ムノンツ		14140/0	14140/0	1414070	0.00	1930年北伊豆地震
笠		伊克沙斯园	6.7程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
笠原弧		伊東沖断層	(注5)	_	XYZY		1 PJ	1799	小奶	/N 997	1980年伊豆半島東方沖の地震
3/			7.0程度		Xランク		不明	不明	不明	不明	不明
		個以例 唐 帝	1.0怪及	_	A) > 9	不明	小奶	小奶	/N 997	1978年伊豆大島近海の地震	
		了 威·依·医	$6.9 \sim 7.0$	_	Vランカ		7°111	7°111	不明	7 III	不明
			程度		Xランク		不明	不明		不明	1974年伊豆半島沖地震

(区域6) 糸魚川一静岡構造線周辺

4.	主要活断	活断層のくくり (評価単位区間)		複数区間が同時に活動する場	我が国の 主な活断層 における 相対的評価 ^(注4)		地震発生確率(注1)			地震後経過率	平均活動間隔
糸魚川	断層帯		合の地震 の規模(M)		ランク	色		50年以内	100年以内	(注2)	最新活動時期
	-	糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注11)	7.7年度		Cルニンカ		0.000% 10%	0.00%00%	0.05% 40%	0.4.1.0	1,000年-2,400年程度
静岡		(北部区間)	7.7程度		S*ランク	F 729	0.008%~16%	0.02%~20%	0.05%~40%	0.4-1.3	約1,300年前以後-約1,000年前以前
岡構造線周辺		糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注11)	7.6程度	7.8-8.1	S*ランク		13%~30%	20%~50%	40%~70%	1.0-2.0	600年-800年程度
追線	0	(中北部区間)	7.0住及		3本 ノンツ		13% 230% 20% 250% 40% 2	40% - 70%	1.0 2.0	約1,200年前以後-約800年前以前	
周		糸魚川一静岡構造線断層帯 ^(注11)	7.4程度	程度	ヒルランカ		0.8%~8%	1% ~ .10%	4%~30%	0.6-1.0	1,300年-1,500年程度
辺		(中南部区間)	7.4性及		S*ランク	0.8% -8%	1%~10%	4%~30%	0.6-1.0	約1,300年前以後-約900年前以前	
		糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注11)	7.6程度		Λランク	,	/手/手0%~0.1%	% ほぼ0%~0.2%	171F0%~0 1%	0.2-0.5	4,600年-6,700年程度
		(南部区間)	7.0住及		Aランク		はは0%~0.1%		(はは0%~0.4%	0.2-0.5	約2,500年前以後-約1,400年前以前

注1: 確率値は有効数字1桁で記述している。ただし、30年確率が10%台の場合は2桁で記述する。また「ほぼ0%」とあるのは、 10^{-3} %未満の確率値を表す。ま た、平均活動間隔が判明していない等の理由により、地震発生確率及び地震後経過率を求めることができないものは「不明」としている。

注2: 最新活動(地震発生)時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔 に達すると1.0となる。値は0.1単位で記述し、0.1未満の場合は有効数字1桁で記述している。また「ほぼ0」とあるのは、 10^{-3} 未満の値を表す。

最新活動の時期が特定できていないため、通常の活断層評価で用いている計算方法(地震の発生確率が時間とともに変動するモデル:BPT分布モデル) ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方(ポアソン過程)により長期確率を求めている。同じ理由から、地震後経過率も求められない。

注4: 活断層における今後30年以内の地震発生確率が3%以上を「S ランク」、 $0.1 \sim 3\%$ を「A ランク」、0.1%未満を「Z ランク」、不明(すぐに地震が起きるこ とが否定できない)を「Xランク」と表記している。地震後経過率(注2)が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している。

注5: 断層の長さに基づいて地震の規模を評価した結果がM6.8未満となる場合、ここでは地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会(2010)に従い、地 震の規模の下限M6.8を用いて評価している。地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会(2010)は、長さが20km に満たない単位区間が単独で活 動する場合に、その長さに基づき松田(1975)の経験式を用いて地震の規模を評価した場合は地震の規模を過小評価している可能性があるとして、地表に 変位が現れている活断層については、最低限考慮すべき地震の規模としてM6.8 を設定するとしている。

注6: 長野盆地西縁断層帯については、これまで飯山-千曲区間を単一の活動区間として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会、2001)。そ の後、同断層帯延長部の分布に関する新たな知見に基づき、飯山一千曲区間の南方延長に麻績区間を新たに追加して評価を行った(地震調査研究推進本部 地震調査委員会、2015)。従来の名称「信濃川断層帯(長野盆地西縁断層帯)」(地震調査研究推進本部地震調査委員会、2001)は、評価の結果、「長野 盆地西縁断層帯 (信濃川断層帯)」 (地震調査研究推進本部地震調査委員会,2015) と称することとしたので、ここでは長野盆地西縁断層帯と記述した。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2001):「信濃川断層帯(長野盆地西縁断層帯)の評価」,22p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2015):「長野盆地西縁断層帯(信濃川断層帯)の長期評価(一部改訂)」,34p.

注7: 深谷断層帯・綾瀬川断層については、これまで関東平野北西縁断層帯として平井-櫛挽断層帯・主部の2区分、また、元荒川断層帯として北部・南部に2区 分して評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2000、地震調査研究推進本部地震調査委員会,2005)。地震調査研究推進本部地震調査 委員会 (2015) は、その後に得られた新たな知見に基づき、関東平野北西縁断層帯の平井-櫛挽断層帯から主部の一部までを深谷断層帯、また、元荒川断 層帯の北部(関東平野北西縁断層帯の一部)を綾瀬川断層の鴻巣ー伊奈区間、元荒川断層帯の南部を伊奈ー川口区間として評価を行った。綾瀬川断層南部 (伊奈-川口区間) は、元荒川断層帯の南部に対応しこれまで活断層ではないとされていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2000)が、新たな知 見により活断層の可能性を認定した(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2015)。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2000):「元荒川断層帯の評価」,15p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2005) : 「関東平野北西縁断層帯の長期評価」, 34p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2015): 「深谷断層帯・綾瀬川断層(関東平野北西縁断層帯・元荒川断層帯)の長期評価(一部改訂)」,

注8: 塩沢断層帯・平山-松田北断層帯・国府津-松田断層帯については、これまで神縄・国府津-松田断層帯として国府津-松田断層帯から塩沢断層までを一 連の断層帯として評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2009)。その後、国府津-松田断層帯については、プレート境界からの分岐 断層と判断し、相模トラフ沿いのM8クラスの地震の何回かに一回の割合で同時に動くと評価した(地震調査研究推進本部地震調査委員会,2014)。また、 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2015)は、断層帯を構成する断層やそれらの位置・形状、周辺の地下構造、活動履歴に関する新たな知見に基づ き、神縄断層を活断層ではないと判断し、塩沢断層帯を伏在断層として南西方向へ延長する等の評価を行った。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2009):「神縄・国府津-松田断層帯の評価(一部改訂)」,35p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2014) : 「相模トラフ沿いの地震活動の長期評価 (第二版) について」, 81p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2015): 「塩沢断層帯・平山-松田北断層帯・国府津-松田断層帯(神縄・国府津-松田断層帯)の長期評価

(第二版)」, 55p.

曽根丘陵断層帯は、最新活動時期が約10000年前以後と求められているが、平均活動間隔2000-3000年に対して十分に絞り込まれていない。このため、地震 発生確率の計算に際しては、ポアソン過程を用いた。同じ理由から、地震後経過率も求めてない。

注10: 富士川河口断層帯については、駿河トラフで発生した海溝型地震に伴って活動してきたと考えられる。そのため、他の活断層の評価と一概に比較できない ことから、別途、参考として記載した。富士川河口断層帯については、その過去の活動時期などについて、2つの可能性が考えられることから、2つの ケースに分けて評価している。ケースaの場合、富士川河口断層帯は駿河トラフで発生する海溝型地震と連動して同時に活動し、活動の際には浮島ヶ原地区 で沈水現象が生じると考えられる、と評価した。 ·スbの場合、浮島ヶ原地区で認められた沈水現象については、富士川河口断層帯の活動を伴わな また い海溝型地震の履歴を表している可能性があり、富士川河口断層帯の過去の活動時期は、断層近傍の地表で変位が生じた時期に基づいて推定するべきであ るとして評価した。いずれのケースであっても、発生する地震の規模は、駿河トラフで発生する海溝型地震と連動して同時に活動する場合の規模を推定し ている。なお、富士川河口断層帯の陸上部で認められている断層が単独で活動する可能性もあり、その場合、マグニチュード7.2程度の地震が発生する可能 性がある。

また、将来確率について、ケースaの場合、最新活動時期からの経過時間が平均活動間隔の2倍を超えているため、通常の活断層評価で用いている計算方法 (地震の発生確率が時間とともに変動するモデル: BPT分布モデル)ではなく、地震発生確率が時間的に不変とした考え方(ポアソン過程)により長期 確率を求めている。なお、活断層の相対的評価については、他の活断層帯と比較した際に今回評価した地震発生確率をそのまま当てはめた場合にはどうな るかを参考までに示したということに留意されたい。

注11: 糸魚川-静岡構造線断層帯については、これまで北部・中部・南部に3区分して評価を行っていた(地震調査研究推進本部地震調査委員会,1996)。地震調 査研究推進本部地震調査委員会(2015)は、その後に得られた新たな知見に基づき、北部・中北部・中南部・南部の4つの区間に再区分して評価を行った。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(1996):「糸魚川-静岡構造線活断層系の調査結果と評価」, 10p. 地震調査研究推進本部地震調査委員会(2015):「糸魚川-静岡構造線断層帯の長期評価(第二版)」, 60p.

(2)関東地域の長期評価

······	地域の長期評価 (M6.8以上、30年確率) (%) ^(注12、注13)						
地域区分	区域別の確率値	関東全域の確率値					
	95%信頼区間(中央値)	(注14)					
東北日本弧南方延長	4-5						
宋礼日本城田乃建议	(5)						
信濃褶曲帯	2-3						
日版旧曲市	(2)						
関東山地-関東平野	1-3						
闵米山地 闵米干封	(2)	50-60					
伊豆-小笠原弧の衝突	15-20	(50)					
プレート沈み込み帯	(17)						
伊豆一小笠原弧	2-3						
[产立 / 广立/宋·城	(3)						
糸魚川一静岡構造線周辺 	30-40						
八点川 时间语起脉冲及	(30)						

注12: 個別の活断層の長期評価では、地表に断層活動の痕跡が確認できる「固有地震」(※)の発生確率のみを評価している。一方、マグニチュードが6.8 以上の地震でも明瞭な地表地震断層が出現しない場合や、出現しても長さやずれの量が推定されるものに比べて有意に小さい場合があることを鑑み、本地域評価では、評価対象とした活断層において地表の証拠からは断層活動の痕跡を認めにくい地震の発生する確率も評価している(地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会、2010)。詳細は本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/15apr_chi_kanto/ka_honbun.pdf]の注16参照。

※ 「固有地震」とは、同時に活動すると想定される「活断層帯」や「評価単位区間(詳細は、本文 [http://www.jishin.go.jp/main/chousa/15apr_chi_kanto/ka_honbun.pdf]の「付録2 1回の地震に対応して活動する断層の長さの評価の考え方」を参照)」の全体が活動する固有規模の地震のことである。Schwartz and Coppersmith(1984, 1986)が提唱したCharacteristic earthquake model について、垣見(1989)が「個々の断層またはそのセグメントからは、基本的にほぼ同じ(最大もしくはそれに近い)規模の地震が繰り返し発生すること」と解釈しているものである。

注13: 各区域及び評価対象地域全域における今後30年間以内に発生するマグニチュード6.8以上の地震発生確率には、主要活断層帯及び主要活断層帯以外の活断層に基づく確率が含まれている。詳細は本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/15apr_chi_kanto/ka_honbun.pdf]の説明文1-(2)「評価区分」を参照。

注14: 確率値は、本文[http://www.jishin.go.jp/main/chousa/15apr_chi_kanto/ka_honbun.pdf]の「付録 4 - 2 評価地域の地震の発生確率の算出」に基づく。

2. 海溝型地震の長期評価の概要(算定基準日 平成30年(2018年)1月1日)

(海溝型地震の今後10,30,50年以内の地震発生確率)

: 経年により値が変わったもの

			長期評価で予想した	地	震発生確率 ⁽ⁱ	注1)	地震後	平均発生間隔 ^(注1) (上段)
	領域またに	ま地震名	地震規模(マグニチュード)	10年以内	30年以内	50年以内	経過率 (注2)	最新発生時期 (下段 : ポアソン過程を適用 したものを除く)
南海トラフの地震	南	海トラフ	M8~M9クラス	30%程度	70% ~ 80%	90%程度 もしくは それ以上	0.82	次回までの 標準的な値 ^(注3) 88. 2年 72. 0年前
	東北地	方太平洋沖型	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.01	600年程度 6.8年前	
	房三 総沖 沖北 海部	津波地震(注5)	Mt8.6~9.0 ^(注6)	9%程度 (2%程度)*	30%程度 (7%程度)*	40%程度 (10%程度)*	_	103年 (412年) * * ()は特定海域での値 —
	溝か 寄ら り (注4)	溝か 寄ら り 正断層型 8.2前後 Mt8.3前後		1%~2% (0. 3%~ 0. 6%) *	4%~7% (1%~2%)*	6%~10% (2%~3%) *	-	400年~750年 (1600年~3000年) * * () は特定海域での値
Ξ	三陸沖北部 (注4) 繰り返し発生 する地震以外 の地震		8.0前後 Mt8.2前後	ほぼ0% ~2%	4%~20%	60%程度	0. 51	約97.0年 49.6年前
三陸沖かれ			7.1~7.6	50%程度	90%程度	90%程度 以上	_	約14.1年 —
ら房総沖	三陸	· 沖中部 ^(注7)	-	_	_	_	_	
にかけ	宮城県沖		7.4前後	不明 ^(注8)	不明 ^(注8)	不明 ^(注8)	不明 ^(注8)	
ての地		繰り返し発生 する地震以外 の地震	7.0~7.3	30%程度	60%程度	80%程度	_	約31.8年 —
震(第二	三陸沖	南部海溝寄り	7.9程度	ほぼ0%	ほぼ0%	0.03%~ 0.4%	0.06	約109年 6.8年前
版		繰り返し発生 する地震以外 の地震	7.2~7.6	20%程度	50%程度	70%程度	_	約42.3年 —
	禕	· 畐島県沖	7.4前後(複数の地 震が続発する)	5%程度	10%程度	20%程度	_	約206年 —
	秀		6.9~7.6	30%程度	70%程度	90%程度	_	約25.6年 ————————————————————————————————————
		繰り返し発生 するプレート間 地震 6.7~7.2		10%~20%	90%程度 以上	90%程度 以上	0. 31	約21.9年 6.8年前
	房	総沖 ^(注7)	_	_	_	_	_	
	太平洋	プレート内 ^(注7)	_	_	_	_	_	

		長期評価で予想した	地	震発生確率 ⁽⁾	注1)	地震後	平均発生間隔 ^(注1) (上段)
4	領域または地震名	地震規模 (マグニチュード)	10年以内	30年以内	50年以内	経過率 ^(注2)	最新発生時期 (下段 : ポアソン過程を適用 したものを除く)
	超巨大地震 (17世紀型) ^(注9)	8.8程度以上	2%~10%	7%~40%	10%~60%	1.00~1.14	約340年~380年 17世紀
	十勝沖	8.0~8.6程度	0. 07%	8%	30%程度	0. 18	80.3年 14.3年前
_	根室沖	7.8~8.5程度	20%程度	80%程度	90%程度 以上	0. 68	65.1年 44.5年前
千島海港	色丹島沖及び択捉島沖	7.7~8.5前後	20%程度	60%程度	80%程度	-	35. 5年 —
溝沿いの	小 ひ ト	7.0~7.5程度	40%程度	80%程度	90%程度	_	20.5年 —
地震(地プわ 震レり ・ 大捉島沖・ 大捉島沖・	7.5程度	50%程度	90%程度	90%程度 以上	-	13.7年 —
第三版	十勝沖から択捉島沖の 海溝寄りのプレート間 地震(津波地震等)	Mt8.0程度	20%程度	50%程度	70%程度	_	39.0年 —
	沈み込んだプレート内 のやや浅い地震	8. 4前後	10%程度	30%程度	40%程度	_	88.9年 一
	沈み込んだプレート内 のやや深い地震	7.8程度	20%程度	50%程度	70%程度	-	39.0年 —
	海溝軸の外側で 発生する地震 ^(注10)	8. 2前後	_	_	-	-	
	北海道北西沖の地震	7.8程度	0.002%~ 0.04%	0.006%~ 0.1%	0.01%~ 0.2%	0. 54	3900年程度 約2100年前
	北海道西方沖の地震	7.5前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0. 02-0. 06	1400~3900年程度 77.4年前
日	北海道南西沖の地震	7.8前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0. 02-0. 05	500~1400年程度 24.5年前
本海東縁	青森県西方沖の地震	7.7前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0. 02-0. 07	500~1400年程度 34.6年前
移部の地	秋田県沖の地震	7.5程度	1%程度以下	3%程度以下	5%程度以下	_	1000年程度以上 -
震	山形県沖の地震	7.7前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.18以下	1000年程度以上 184.1年前
	新潟県北部沖の地震	7.5前後	ほぼ0%	ほぼ0%	ほぼ0%	0.05以下	1000年程度以上 53.5年前
	佐渡島北方沖の地震	7.8程度	1%~2%	3%~6%	5%~10%	ı	500~1000年程度 —
日向灘	安芸灘〜伊予灘〜 豊後水道の プレート内地震	6.7~7.4	10%程度	40%程度	50%程度	-	約67年 ————————————————————————————————————
舞および	日向灘の プレート間地震	7.6前後	5%程度	10%程度	20%程度	_	約200年 —
) 南西諸	日向灘の ひとまわり小さい プレート間地震	7.1前後	30%~40%	70%~80%	80%~90%	ı	約20~27年 —
島海溝	南西諸島周辺の 浅発地震 ^(注11)	-	_	_	_	_	_ _
周辺の	九州から南西諸島周辺 のやや深発地震 ^(注11)	_	_	_	_	_	
地震	与那国島周辺の地震	7.8程度	10%程度	30%程度	40%程度	_	約100年 —
相模トラ	次の相模トラフ沿いの M8クラスの地震 ^(注12)	M8クラス (M7.9∼M8.6)	ほぼ0%~2%	ほぼ0%~5%	ほぼ0%~ 10%	0. 16-0. 52	180~590年 ^(注13) 94. 3年前
地震アン	プレートの沈み込みに 伴うM7程度の地震	M7程度 (M6.7~M7.3)	30%程度	70%程度	80%程度	_	27.5年 一
沿い	伴うM7程度の地震	(M6.7∼M7.3)	₩ 30 /0/1至/交	10/01年/吳	00/01至/殳	_	_

上記表中、「ほぼ0%」とあるのは、 10^{-3} %未満の確率値を表す。

- 注1: これらの評価は、基準日を元に更新過程を適用。また、三陸沖北部から房総沖の海溝寄りの地震、三陸沖北部のひとまわり規模の小さい地震、福島県沖の地震、色丹島沖及び択捉島沖の地震、十勝沖から択捉島沖の海溝寄りのプレート間地震、千島海溝沿いのひとまわり規模の小さい地震および沈み込んだプレート内の地震、日本海東縁部の秋田県沖の地震、佐渡島北方沖の地震、日向灘および南西諸島海溝周辺の地震、相模トラフ沿いのその他の南関東のM7程度の地震については、ポアソン過程を適用。
- 注2: 最新発生時期から評価時点までの経過時間を、平均発生間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均発生間隔に達すると1.0となる。
- 注3: 過去に起きた大地震の震源域の広がりには多様性があり、現在のところ、これらの複雑な発生過程を説明するモデルは確立されていないため、平成25年5月に公表した長期評価(第二版)では、前回の長期評価を踏襲し時間予測モデルを採用した。前の地震から次の地震までの標準的な発生間隔は、時間予測モデルから推定された88.2年を用いた。また、地震の発生間隔の確率分布はBPT (Brownian Passage Time)分布に従うと仮定して計算を行った。
- 注4: 平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震に伴い、地震発生確率が表の値より高くなっている可能性がある。
- 注5: 東北地方太平洋沖地震の震源域に含まれる三陸沖中部から三陸沖南部海溝寄りの沖合に至る部分については、この地震によりこれまでの歪を解放した状態と考えられる。そのため、この部分の将来の地震発生確率は表中の値よりも小さいと考えられる。
- 注6: Mtは津波の高さから求める地震の規模である。Mt8.6および9.0の値は、阿部(2003)の1896年明治三陸地震のMtを採用した。 阿部勝征,2003,津波地震とは何か?,月刊地球,vol.25,No.5,337-342.
- 注7: 三陸沖中部、房総沖は対象となる被害地震がないため確率の評価を行っていない。太平洋プレート内の地震はデータ期間が14年間と短く 1997年より過去のデータについては不明のため確率の評価を行っていない。
- 注8: 余効変動が依然として継続しており、アスペリティの固着が確認できないため確率は算出できない。
- 注9: 津波堆積物の調査結果等より平均発生間隔を340年~380年と推定し、BPT分布モデルを適用して算出した。津波堆積物から推定される地震発生年代に幅があり、発生間隔のばらつきが大きいため、確率値の幅も広くなっている。
- 注10: 海溝軸外側の地震については、過去に発生した履歴が無く、確率は不明である。しかし、評価対象領域の北東側では2007年にM8.2 (Mw8.1) が、隣接する日本海溝沿いの領域では1933年にM8.1 (Mw8.4) の地震(昭和三陸地震)が発生しているため、同様の規模の地震が千島海溝でも発生する可能性がある。
- 注11: これらの領域については、地震発生の特性を明らかにするための十分な知見が得られていないことや、長大な設定領域において発生する場所を特定できないこと等により、対象となる地震の平均発生間隔などを評価しなかった。
- 注12: 従来、大正型関東地震と元禄型関東地震と分けて評価していたが、 震源域の多様性より、単純にこの2つの型に分けられないと考え 「相 模トラフ沿いのM8クラスの地震」として一括して評価した。 房総半島南部にある海岸段丘の沼面を形成する地震(元禄関東地震相当かそれ以上)の平均発生間隔は約2300年で、今後30年以内の発生確 率はほぼ0%である。
- 注13: 歴史記録および地形・地質データより推定した平均発生間隔(320年、390年)とばらつきの値より、地震の発生間隔は180~590年程度でばらっくものと推定した。

(参考) 平成28年(2016年) 熊本地震発生直前における確率

	断層帯名	発生した地震規模		地震発生確率	<u>z</u>	地震後	平均発生間隔
	例信守石	(マグニチュード)	30年以内	50年以内	100年以内	経過率	最新発生時期
Ī	布田川断層帯	7. 3	ほぼ0%~	ほぼ0%~1%	l∓l∓0%~3%	0. 08-0. 9	8,100年-26,000年程度
	布田川区間	1. 5	0.9%	1010000 - 170	1010000 - 000	0.00 0.9	約6,900年前以後-約2,200年前以前

(参考) 平成23年(2011年) 東北地方太平洋沖地震発生直前における確率

領域または地震名	発生した地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率			地震後	平均発生間隔
		10年以内	30年以内	50年以内	経過率	最新発生時期
東北地方太平洋沖地震	9. 0	4%~6%	10%~20%	20%~30%	0.83~ 1.00	600年程度
						約500~600年前

(参考) 平成7年(1995年) 兵庫県南部地震発生直前における確率

断層帯名	発生した地震規模 (マグニチュード)	地震発生確率 30年以内	地震後 経過率	平均活動間隔
六甲・淡路島断層帯主部 淡路島西岸区間 「野島断層を含む区間」	7. 3	0.02%~8%	0.5-1.2	1700年~3500年